

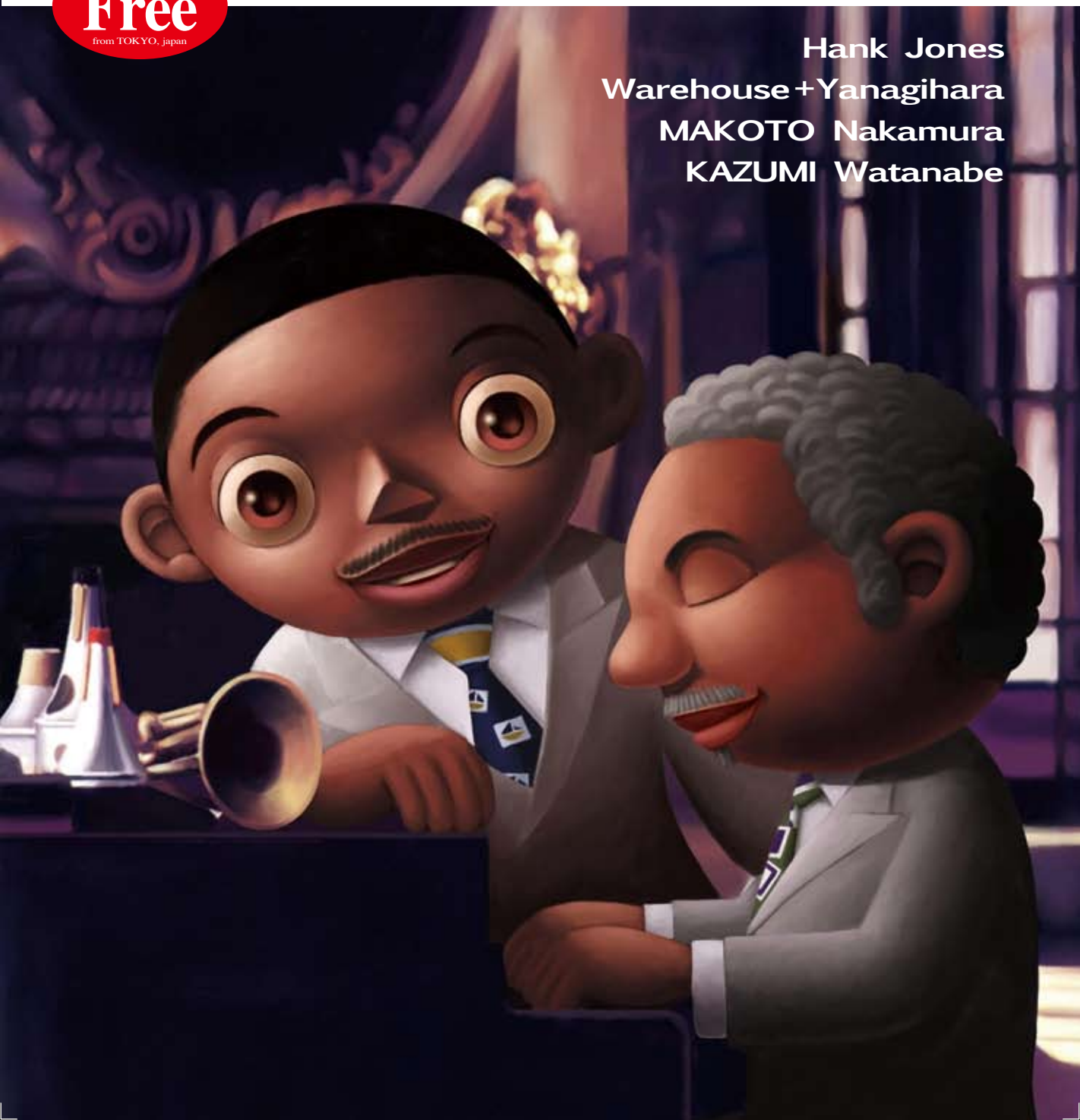
# Jazz Today®

Monthly Free Magazine

2006.08 **No.28**



Hank Jones  
Warehouse + Yanagihara  
MAKOTO Nakamura  
KAZUMI Watanabe



# HANK JONES



JazzToday Special INTERVIEW

## ハンク・ジョーンズに 会ったんだ!

連載第1回

### 摩天楼を仰ぐまで

聞き手：末次安里（本誌編集長）

リンゴの例が伝わりやすいかもしれない。あなたの一番好きなビートルズの作品でいい。ただし、リンゴ・スターが叩いている曲を選び、ひたすら彼のドラミングに耳力を集中させてかけてほしい。どうだろう、あれだけ親しんだ曲がやけに新鮮に響かないだろうか。

次に『SOMETHIN' ELSE』から耳タコ気味の＜AUTUMN LEAVES＞を聴いてみよう。ハンクのソロが展開される部分ではなく、マイルスやキャノンボールの影でその指先が演じている表情にどうか集中してほしい。＜枯葉＞をやさしく撫でては揺らしている微風の舞いが見えてこないだろうか。なぜ彼が抜擢されたのか、その理由が分かるはずである。

次にあなたのコレクションからハンクがリバッキングを務めている他の作品を引き出し、同じ聴き方をしてほしい。ジャケットを並べて俯瞰してみるのも一向だろう。従来の見識とはまた少し違ったジャズの歴史が読み取れないだろうか。これがハンクの足跡である。

ハンク・ジョーンズは7月31日を以って88歳の誕生日を迎える。今月から数号に渡って彼自身の証言を紹介するけれども、聞き手の主眼はあくまでも彼の記憶に伴奏しながら想い出を引き出すという点にこそあり、毎号任意に掲載する各アルバムの分析や研究が目的ではない。上記のスタンスを念頭に置きつつ、あなた自身の手持ちのアルバムを愉しみながら併読していただければ幸甚である。老いてますます瑞々しいハンクの話を楽しもう。



SOMETHIN' ELSE  
CANNONBALL ADDERLEY

NORMAN GRANZ' J.A.T.P. CARNEGIE  
HALL, 1949

Now' s the time  
the Quartet of Charlie Parker

MUSIC WITH FEELING  
BEN WEBSTER WITH STRINGS

JT: JazzToday: 本誌はこれまで2回、あなたの近作について触れさせてもらいました。しかし、いずれも資料に基づいてのレコ評でしたので、今回は直接お会いできて光栄です。時には脱線しつつも、いろいろと伺いたい事柄がありますのでよろしくお付き合いください。

Hank Jones: いいですよ、遠慮なく何でも聞いてください(笑)。

JT: まず、少年時代のピアノの師であられるポーリン・フリスビー女史についてなんですが、なんでも彼女はのちに「キャロット・フランゼ」 という名前が女優もなさっていたとか。どんな女性でしたか。

HJ: 彼女はとても素敵な先生でね。のちに女優だけではなく、歌手としても活躍されていたんだよ。ブロードウェイの舞台を務められた経験もあるし、私が幼少期を過ごしたポンティアックでコンサートも開かれるような女性だったんですよ。

JT: 彼女に学んだコトで「今」に繋がっている経験があれば教えてください。

HJ: OK。まず、初めて出遭う先生というのは誰にとっても大事な存在だよ。なぜならば人間、「最初に得たもの」をあとから忘れるということはなかなか難しいだろう(笑)。だから下手な先生と遭って、下手なことを刷り込まれてしまうとあとでそれを取り除くコトは難しいよね。そういう意味では私の場合、最初に彼女から習えてとても光栄だったと今でも思っているんだ。そもそも「ストライドピアノ」というものがどういふものなのか、それを初めて彼女に教えてもらったわけですよ。

JT: ああ、そうなんですか。

HJ: そうなんだ。

JT: その辺を詳しく聞かせてください。

HJ: 正確に話すと、先生が実際にストライドピアノを私の目の前で弾いて教えた、というわけではないんだ。あくまでも概念的なものとしてというか、テクニックとしてこういうものもあるんですよ、というかたちで教授してくれたわけだけれども…それまで私が自宅で聴いていたのはブルースのピアノばかりで、そういうストライドピアノをフューチャーしたレコードがあったわけではないんでね。彼女に教えてもらうまではそういう奏法自体を知らなかったというわけさ。

※

JT: ハンクさんは元号に置き換えると大正7年生まれですから、僕の亡母よりも年配であられるのに大変お元気です(笑)。NYに出られたのが太平洋戦争終結の前年(1944年)だそうですが、直接のきっかけを聞かせてもらえますか。

HJ: その前に私はバッファローに住んでいて、ジョージ・クラークの楽団にいたんだ。そこからNYに出てきたわけだけれども、知人のラッキー・トンプソン(ts)が当時、ホット・リップス・ペイジのバンドでずっと吹いていたんだよ。で、そのバンドのピアニストが抜けるから「代わりを探している」と…面識は一切なかったけれどもラッキー・トンプソンが紹介してくれて、それで出てきたわけさ。

JT: 仕事が約束されたかたちでのNY行きだったんですね。

HJ: そういうコトだね。ただ、ユニオンに登録申請して正式に認められるまではバンドの常任で仕事するコトは許されていないわけ。つまり当初は「月に数回しかやれない」という条件下でプレイするわけだから、実際はいろいろなシンガーの下で仕事したりとか、そういう状態で半年間は我慢していたんだ。で、6ヶ月目によくユニオンの認可が下りて、正式なメンバーになれたんだよ。それが移住の直接のきっかけだね。

JT: われわれ日本人にもよく知られている存在で、当時“志”を同じくしていた人たちはどんなあたりですか？

HJ: たとえば、ジョン・ルイスとかトミー・フラナガン、それとバリー・ハリスかな…彼らは同郷人というわけではないけれども、教会音楽を子供の頃から聴いていたりと、聖歌隊に入っていたりとか、そういう育ち方の面では似ているよね。

JT: 前者のお二人とはデュオ作品もおやりになっていますね。

HJ: そうだね。でも、トミーとはレコーディングの共演だけで…一緒にナイトクラブで共演したりとか、コンサートツアーに出たとかいう経験はないんですよ。

JT: これは時代の証言者として是非お聞きしたのですが、ハンクさんはビ・バップのシーンとどうかたちで出遭い、どういう印象を受けられたのでしょうか。

HJ: 自分自身に則して語ると、私がNYに着いた頃には丁度ビ・バップが終わりかけていた、というか一山盛り上がってスウ〜ッと落ち着きかけるギリギリ前の時だったんだ(笑)。だから、それがどうやって始まったのかという場面には実際、立ち会わなかったわけではないんだね。

JT: そういふタイミングなんですね。

HJ: ただ、通称“スイング・ストリート”と呼ばれていた52丁目の、5thと6thの間ぐらいのところに50軒前後のジャズクラブが向かい合わせて立っているようなエリアがあってね。そこには連日いろいろなミュージシャンが集うコトから始まった、という噂だけは聞いていて…。

JT: その頃はまだ、バッファローの空の下で過ごしてられた…。

HJ: そう。まだ、NY以外の場所ではそういう演奏がされていないとか、要は“演奏できる人がいなかったわけだから…NYに出てくる以前は“そういう感じの音楽のやり方があるよ”と噂で聞いただけであって、実際に体験したことはなかったわけだね。

JT: で、実際に触れてみて印象ぶかい人物は？

HJ: バップでいうならばチャーリー・パーカーとバド・パウエル。この二人がまさに“バップの申し子”と言われる存在なんだけど、あと加えるとしたらファッツ・ナバロとマイルス・デイヴィスの名前も忘れてはいけないよね。実際、彼らがやっている頃が一番盛り上がっていたし…それからコールマン・ホーキンスの〈Body&Soul〉は実際問題、皆がそれを元に練習したものですし。もちろんディジー・ガレスピーもスイング・ストリートで健在だったからね。ただ、彼もビ・バップ風なコトをやっていたけれども、いわゆるチャーリー・パーカーが追い求めていたものとは少しタイプの違うものをやってみたという印象があって、それを強く憶えているね。

JT: それが飛び火して、という部分ではどうだったでしょう。

HJ: 正式にNYで活動していたわけではないという面々でいえば、ワーデル・グレイやラッキー・トンプソンなんかはそういう音楽も知っていたし、ある時期NYで少し仕事してから他の土地に移ったりしていたからね。彼ら経由でいろいろと聞いたりしていた部分もあったりしたんだけど…結局、私の場合はサイドミュージシャンなので、「自分が今どんなリーダーの下に務めているのか」「リーダーが求めている音楽はどんなものなのか」という環境次第で“自分のやる音楽”とかが変わってくるので。バリバリにやったコトはなかったですよ、あの当時は。

(次号に続く)

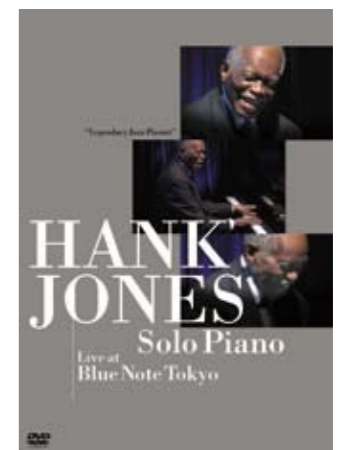


## Live at Blue Note Tokyo The Great Jazz Trio

VRBL-7801 ¥ 4,935 (tax in) 2006/7/19 Release

**The Great Jazz Trio 結成 30 周年記念！！**  
ブルーノート東京での至福の夜が映像で甦る。

1. A 列車で行こう / 2. いつか王子様が / 3. リコーダミー
  4. ラウンド・ミッドナイト / 5. シックス・アンド・フォー
  6. ブルー・ボッサ / 7. マイ・ロマンス / 8. テイク・ファイブ
  9. ザ・ヴェリー・ソート・オブ・ユー (ピアノ・ソロ)
  10. ムース・ザ・ムーチ
- 2006年3月5日、ブルーノート東京でのライブ収録  
[パーソネル]  
ハンク・ジョーンズ (piano)  
デヴィッド・フィンク (bass)  
ジェローム・ジェニングス (drums)



## Solo Piano ~ Live at Blue Note Tokyo Hank Jones

VRBL-7801 ¥ 4,935 (tax in) 2006/7/19 Release

1. キャラヴァン / 2. サマータイム / 3. オー・ブリヴァーヴ
  4. ウィロー・ウィーブ・フォー・ミー / 5. ブルー・モンク
  6. アローン・トゥゲザー / 7. いつか王子様が / 8. 黒いオルフェ
  9. スピーク・ロウ / 10. 酒とバラの日々
  11. ジョージア・オン・マイ・マインド / 12. 二人でお茶を
  13. フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン
  14. ラヴ・フォー・セール / 15. 煙が目にしみる
- 2006年3月12日、ブルーノート東京でのライブ収録  
[パーソネル] ハンク・ジョーンズ (piano)

# ふくよかで スキュートで スタイリッシュな好盤

text by 前原雅子



## 柳原陽一郎 プロフィール

'62年、福岡県生まれ。'84年「たま」結成。'90年「さよなら人類/らんちう」でデビューし、その個性的な存在感と歌で注目の的となる。

'95年末、バンドを脱退。以降、ジャンルに囚われない様々なスタイルで含みのある日常雑感を紡ぎ、歌い続けている。おおらかで熱のある歌声にもファンが多く、そのワン・アンド・オンリーな歌の世界に対する評価も高い。

アルバム・ディスコグラフィ (柳原陽一郎ソロ)  
1995年「ドライブ・スルー・アメリカ」  
1998年「長いお別れ」  
2001年「ウタノワ」  
2003年「ONE TAKE OK！」  
2005年「ふたたび」

スッピンでもキレイな人は、何をどうしようと魅力的だ。ジーンズにTシャツ姿でも、ゴージャスにドレスアップしても、洋服や化粧というプラスα部分によって見え方が違ったり、新しい魅力を感じさせられたりするだけ。言ってみればぬがせ美人、それが「素」に光るものを持つ人の一番の強みなのではないだろうか。そして、そんな「素」の魅力を思う存分に生き生きと音楽にしてみせてくれたのが、Warehouseと柳原陽一郎による『LADIES AND GENTLEMEN!』というコラボレーション・アルバムだ。

そもそもジャズのフィールドで活動するインストメンタル・バンドのWarehouseと、デ



## Warehouse(ウェアハウス)プロフィール

Warehouseは、bondage fruitの鬼怒無月(g)、高良久美子(per)、大坪寛彦(b)が「サイドユニット」として1998年に結成。前者に対し、タンゴ、ブリテンッシュ・サイケ、ある種の音楽への率直なオマージュ作品、記譜されたアンサンブルの緻密さ...などを取り組みことを目的としている。

## Warehouse + Yanagihara



ビューと同時に一生を風靡したバンド「たま」を経てソロのシンガー・ソングライターとしてポップスやロックのフィールドで活動する柳原陽一郎が出会ったのは、約2年ほど前のこと。柳原のライブにWarehouseの高良久美子(per)が参加したのをきっかけに、今度は逆にWarehouseのライブに柳原がボーカルで参加するなど、主にライブを通じて交流。そこで柳原の楽曲をWarehouse風にアレンジしたり、Warehouseのインスト曲に柳原が歌詞をつけたりして演奏する中で、互いに手応えを感じたのだという。「僕はもう瞬発力だけの人間なので、最初のライブの時点で、これはCDを作るべきだって盛り上がったんですけど(笑)。で、去年の夏くらいに、せっかくだからこのユニットのためのレパートリーを作ろうということになって。そのあたりからですね、具体的にレコーディングの話をはじめたのは(鬼怒無月)

その結果、今春、晴れてレコーディング。共作曲5曲、柳原のオリジナル曲3曲、Warehouseのインスト曲6曲、さらにフォスター作のアメリカ民謡に柳原が日本語詞をつけたカバー曲<辛い日々はこりごりだ>(原題<Hard Times Come Again No More>)の全15曲が完成した。

「共作曲は基本的に先に歌詞を書いて、それにメロディーをつけてもらったんです。でも、どの曲も作る過程で濃密な時間が持てて、いつも自分の頭の中だけでやってる作業を、誰かと共有できる喜びがあったね。ある意味、作詞家的に歌詞を書く面白さもあったし。特に「自転車道路まで」という曲は嬉しかった。曲の種作りから完成まで、すべてセッションで作っていったんですけど、そんなことソロじゃありえないですからね」

(柳原) という、いつもと違う回路を使った音楽作りは、Warehouseにも大きな収穫をもたらした。「歌ものの曲作りは、僕の場合、人生初のことですから。ちょっとした感動でしたよ、「俺にもできた!」って(笑)。あとバンドに客観性が加わったことも、今回のメリットのひとつで、それぞれの個性や素晴らしさを再発見する場面も、非常に多かったですね。なんだ、灯台もと暗しだったんだ一いつて(鬼怒) それにしても「紳士淑女の皆さん!」という呼びかけの言葉をタイトルにただけあって、このアルバム「レビュー」度ははととも高い。全15曲でトータルタイム50分強といった転換の早さもさることながら、曲の個性も驚くほど幅広く、ブルース・ロックにポップス、エスニックにクラシック、アメリカンにフレンチetc...と、次々にカラフルな「出し物」でリスナーを魅了する。けれどもそこに作り込まれた感はなく、むしろ寛いだライブ感を感じてしまうくらいだった。

「全曲、基本は一発録り。つまり事前にちゃんと練習したうえで、計算された一発勝負だったという(笑)。でもボーカルでいうと、今回のレコーディングでやっと力を入れず、力を抜かず、しかも表情豊かに歌う歌い方を手に入れられた気がして。その機会をくれたWarehouseに大感謝します(柳原)

もともとの素材が力強い味を持っていれば、どう調理をしても間違いのない一品に仕上がる。それを地で行った「Warehouseと柳原の『LADIES AND GENTLEMEN!』は、コラボレーションの妙味を越える、ふくよかでキュートでスタイリッシュな音と歌にあふれた佳作である。



## Endless game of Cat and Mouse Warehouse

EWCD-0059 ¥2,300(税込) 2002/7/21 RELEASE

ギター、ヴィブラフォン、アコースティックベースの最小編成が生み出す異次元のアンサンブル。ソフトサイケデリックミュージックカフェ、ウェアハウス!

01.Fuh / 02.Cat box / 03.Ezumi / 04.Good night honey / 05.MUGI no march / 06.Cazoo suite#5 / 07.Bunbaka / 08.Fuhi Fuhi / 09.Liquid Bounty / 10.Mad cafe / 11.8 / 12.Dog and Pepper / 13.Tonekey / 14.Endless game of cat and mouse / 15.Mana's roux

■パーソネル  
鬼怒無月 (g) 高良久美子 (perc) 大坪寛彦 (b)



## patrol girl Warehouse

EWGL-0002 ¥2,500(税込) 2004/6/10 RELEASE

前作『Endless game of Cat and Mouse』の可愛くて不思議なポップ・ワールドが静かな人気を呼んだ異次元室内楽団、ウェアハウスの第2弾!

01.hif / 02.Tomboy and Me / 03.Ring Ring Ring / 04.こんな生活 / 05.Black Sapphire / 06.Dead Man's shoe / 07.Cazoo Suite No.6 / 08.Quarter-man / 09.hif hif / 10.Do Do / 11.4ノットの悪夢 / 12.Slow Fires / 13.Fly me to the moon base.. / 14. Carrot Party / 15. 嵐の模写

■パーソネル  
鬼怒無月 (g, mandolin, syn, vo, cazoo, junk)  
高良久美子 (vib, marimba, per, ds, vo, cazoo, junk)  
大坪寛彦 (b, recorder, vo, cazoo, whistle, junk) hata,

## LADIES AND GENTLEMEN! / Warehouseと柳原

柳原陽一郎とウェアハウスが織りなすミラクルな「うた」の世界

ふたりぼっちは楽じゃないさ・・・  
憧れを捨ててようやく空に虹が架かる  
ボクたちハソレロシッテル

「ふたりぼっち」より

- |                  |                   |   |
|------------------|-------------------|---|
| 01. 辛い日々はこりごりだ   | 09. Milk          | EWGL-0009 2006/7/19 Release ¥2,500 (tax in)                           |
| 02. 19の嫁         | 10. Café Milton   | 鬼怒無月 KIDO NATSUKI (guitar, mandolin, chorus)                          |
| 03. GT116v       | 11. ふたりぼっちー       | 大坪寛彦 OTSUBO HIROHIKO (bass, recorder, ukulele, vocal on M-10, chorus) |
| 04. Vino         | 12. Tè            | 高良久美子 TAKARA KUMIKO (vibraphone, drums, percussion, junk, chorus)     |
| 05. 電気の蟻         | 13. レイ            | と   |
| 06. 満月ブギ         | 14. 自転車道路まで       | 柳原陽一郎 YANAGIHARA YUICHIROU (vocal, pianica)                           |
| 07. Hannon Waltz | 15. Mana's roux#2 |   |
| 08. 好きな顔         |                   |   |





# 山本 隆 自分の中のジャズの美学を貫く

text by 沼田 順

## DIW (その2)



© NAMI OGATA

### Jazz of LIFE シカゴと夜と音楽と 連載 vol.4

## ジャズマクドナルド

text by 尾形奈美

世の中には、ジャズといったら、薄暗くてタバコの煙がモクモクしたクラブで、お酒の入ったグラスを傾けながら聴くもんだと思っている人が多い。日本だったら、オヤジが暗い店で腕組みし、難しい顔しながら聴いているイメージだと言った友だちもいた。確かにジャズクラブに行って、タバコの煙で目がショボショボしたり、酔っ払いにからまれた経験は何度もある。あの暗い雰囲気がいんだという人すらいる。

それでもいい音楽が聴きたいんだからしょうがないと、半ばあきらめていた嫌煙家の私だったが、ある日シカゴのサウスサイドで一枚のチラシを手にした。いかにも手作りのパツとしないチラシだったが、人から勧められたライブには、どんな場所であろうとできる限り行くことにしていたので、一応私は場所と日時を確認した。する

と、マクドナルドと書いてある。それも私にとっては未開の地、サウスサイドの西寄りエリア。マックでジャズう〜!? それも、のどかな日曜のお昼どき。それでもまあ、チャージもないんだし、行くだけ行ってみるか当日、地図を見ながら車を走らせる。両側には窓の割れた廃墟のような建物が並び、昼間だと言うのにほとんど人影がない。見るからに不気味で危ないエリアである。自分のオンボロ車がエンストしないことを切に願いながら、やっと店がたちならぶ広い通りに出た。大きな黄色いMの文字の看板を発見したものの、本当にマックでライブなんてやってるのだろうか、実は異なんじゃないかと思いつつ車をパーキングにとめ、恐る恐る中に入った。

すると、真っ先に目に飛び込んできたのは、立派なスピーカーと音響設備。そして

同じ方向を向いて嬉しそうに座っている中年のおばちゃんたち。テーブルにはもちろんハンバーガーとコココーラ。みんな、そこに偶然居合わせた客ではなくて、ライブを見に来ているのである。

サクスの入ったバンドが演奏を始め、歌いだしたのは、ジュリアという美人な黒人の女の子だった。彼女は燦々と降り注ぐ日差しの中、場所がジャンクフードのメッカであろうとおかまいなしに、圧倒するような貫禄の歌声を披露する。大好きなジャズを楽しみながらマックのハンバーガーにかじりついたって、ここではごく自然な休日の過ごし方なのである。

■尾形奈美 宮城県仙台出身。写真家。2002年 Chicago Jazz Festival に連動して HotHouse Picture Jazz 展に招待出品以来、シカゴを中心に活動してきた。03年、米国の写真雑誌「Photo Review」の国際写真コンテストにて第3位を受賞。今年2月仙台にて初の個展。

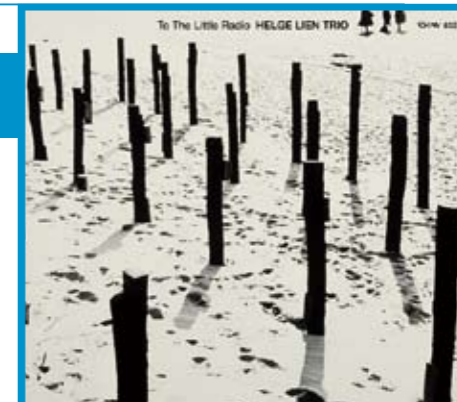
### トゥー・ザ・リトル・ラジオ ヘルゲ・リエン・トリオ

DIW DIW-632 ¥2,625 (税込) 2006/5/26 Release

ピアノトリオの傑作。ヘルゲ・リエンのスタンダード&ジャズ・ナンバー集。溢れ出る旋律美。そして溢れ出る涙。

- 01. グランドファーザーズ・ワルツ / 02. ルック・フォー・ザ・シルバーライニング
- 03. チェルシー・ブリッジ / 04. リトル・サンフラワー / 05. ベネローフ
- 06. アイダ・ルビノ / 07. ソー・イン・ラブ / 08. ラブ・ソング / 09. アマポーラ
- 10. ソノラ / 11. トゥー・ザ・リトル・ラジオ

ヘルゲ・リエン (p) / フローデ・ノルグ (b)  
クヌート・オーレフィアール (ds)



現在のDIW制作担当者、山本隆は生粋のジャズ・ファンである。ディスクユニオンのジャズ部門の仕入責任者でもあり、DIW制作担当をも兼ねている。多忙なのである。彼が制作部門に異動してから手掛けた作品は『寺島靖国プレゼンツ・ジャズ・バー』2004、及び2005、ジョルジュ・ロベール『ソウル・サーチング』、ハクエイ・キム『オープン・ザ・グリーン・ドア』、トミー・フラナガン『プレイズ・ザ・ミュージック・オブ・ハロルド・アーレン』(再プレス発売)、ヘルゲ・リエン・トリオ『トゥー・ザ・リトル・ラジオ』の6作品。さらにハクエイ・キムの次作レコーディングのため、5月にはシドニーまで飛んだ。ハクエイ・キムという新人ピアニストを発掘したことについて「秘めた魅力が感じられた」と、その音楽に「エロティックな感じ」を感じたのでリリースに踏み切ったと彼は語る。「エロティックっていうと読者の人、引いちゃいますかね。でもジャズの要素としてセクシーであるとかエロティックであるとかって、あるじゃないですか。女性ヴォーカルにしてもサクセスにしても」。

そういうのを今後も新人発掘のポイントとして重要視すると、山本隆の美学は明確だ。

「もう既にジャズを30年くらい聴いてきているわけじゃないですか。で、自分がリリースするものに関しては自分の中のジャズの美学を貫きたい。仕入の業務もやっているのだから売れるタイプの商品は分かる。でもそれが自分のジャズの美学と相容れないものであったら、売れると分かっているにもかかわらず作りにあはしれないと思う。」  
そのいい例が5月に発売されたヘルゲ・リエン・トリオ『トゥー・ザ・リトル・ラジオ』の選曲である。ヘルゲのDIW盤前2作品とは明らかに異なる作りとなった。選曲はヘルゲと検討の末、実にマニアックなものとなっており、ここに山本隆のジャズの美学というものを見るべきか。「DIWの制作専任ではないので定期的に出す必要もなければノルマみたいな縛りもない。自分がいいと思ったものだけをリリースできる。だから10年後、20年後にも聴かれ続けるようなものを出したい」。

復刻したいアイテムはあるかとの質問に、すぐさま「メトロノームから出たフレディ・レッドのイン・スウェーデン。ほら、EP3枚で出たヤツあるじゃないですか。あれは実は今交渉中なんですけど、なんとかしたい」。仕

入担当とはいえ、中古盤の面倒も見ているので、彼はジャズ中古盤界のプライス・リーダーでもあるわけだ。フレディ・レッドのオリジナルEP3枚は、まあ〇×万円は下らない。そういえば過去にDIWはメトロノーム盤の3枚のEPトミー・フラナガン『オーヴァーシーズ』を、オリジナルのEPジャケットを使用し、てLP復刻したこともある。あのプレスティックのCCCジャケットじゃないヤツね。それから既に20年以上もの歳月が流れている。「ディスクユニオンの中にあるDIW THE GARDEN や THINK! といったレーベルが若いファン層に訴求するとしたらDIWは老舗としてのプライドみたいなものを伝えていかなければいけないと思う」。それはジャズのメインストリームということではなく、ジャズがジャズであるための根本的なこと、時代は変われど不変のものなのか。好意的に受け取るとそのようなことになるだろう。DIW 発足から約25年が経過し、業界も聴取感覚もすべからく変貌を遂げたジャズの世界にあって、DIWはどのように進化発展してゆくのかわからない。DIWの昔からのいちファン・DIW出身者として、陰ながら応援してゆきたいと思う。(文中敬称略)



テレビ界に“朝の顔”がある如く、“雑誌の顔”は(編集長よりも)表紙である。フリーマガジンにとっては「店頭から無くなる速さ」こそが喜びだが、その加速度を増している最大の要因が、このタジマ画効果。

# タジマ音楽堂

連載5

本当のコトをいうと彼のジャズ画に出遭った瞬間から、「JazzTodayのオリジナルTシャツを造りたいなあ…画伯の作品で！」と密かに思っているのだが、希望者限定生産を募ったらパニックが起きるかな?!

絵と文  
タジマヤスタカ



## アフロ・キューバン ケニー・ドーハム

暑い夏には爽やかにボサノバでも聴きたくるところですが、暑いものや辛いものを食べ、汗をかくて暑気払いをするように、ガツンと暑苦しい音楽を聴くのもまた一興かと。今回はラテン系の3枚で。

ケニー・ドーハム(tp)、ハンク・モブレイ(ts)  
JJ.ジョンソン(tb)、セシル・ペイン(bs)  
ホレス・シルバー(p)、オスカー・ペティフォード(b)、  
アート・ブレイキー(ds)他 1955年録音

人気盤! 静かなるケニーとはまた違うドーハムの熱い一面を聴く事ができるこの1枚。得意の作、編曲の才も発揮し、1曲を除いて全てドーハムのオリジナル。

聴き所はやはりアフロ・キューバンのリズムに乗せての前半4曲で、〈アフロディシア〉、名曲〈マイナース・ホリデー〉などのダイナミックな曲想、演奏。メンバーは当時のメッセンジャーズ+αで感じの賑やかな4管編成で、後ろからは元来ラテン気質のシルバーのピアノが、ブレイキーのタムがごんごんとリズムを鳴き出し、さらにコンガの音もぼんぼこ高らかに。その力強いアンサンブルの中にすいーっと滑り出す、あの例のドーハムのしゃくり上げるような音がなんとも言えず良い感じ。

このアルバム、ひと昔前にロンドンのクラブ・シーン発で人気が再燃してラジオなんかでも結構流れちゃったりしてましたね。ドーハムもあの世でビックリしてたかもしれません。どうです、踊っちゃう?



## ラテン・ビット グラント・グリーン

タイトルもビジュアルもわかりやすいですね。「そう、これはラテン物のアルバムですよ」帽子を被ってボンチョを羽織り、ギター抱えてニカッと笑う。結構ノリノリじゃないですか、ジャケット写真のグリーン。

グラント・グリーン(g)、ジョニー・エイシア(p)  
ウェンデル・マーシャル(b)、パタート・ナルデス(conga)  
ウィリー・ボボ(ds)、ガーヴィン・マッソー(chekere)  
1962年録音

のどかで楽しい〈マンボ・イン〉に始まり、昔の日活映画のキャバレーのシーンで流れていそうな感じの〈ベサメ・ムーチョ〉ではヤラしくチョーキングもキメて。

躍り上がるようにメロディを次々とフェイクしていく〈ブラジル〉、コンガとシェクレがぶんちゃかともードをかもし出す〈テココティコ〉。最後はパーカーの〈マイ・リトル・スエード・シューズ〉で和やかに締めます。

グリーンがいつものようにファンキー・フレバーを振りまきつつ、お馴染みのラテン・ナンバーを軽いついで次々と料理していくのですが、あまり力が入り過ぎて無いのがいい感じ。ほどよいユルユル加減が聴いている人のココロをリラックスさせてくれます。ピアノのエイシアがまたツボを心得た好サポート。

ムツかしい事はひとまず置いて、夏の午後、ビールでも片手に「イェ〜!」とか「アミーゴ!」などとテキトーな事を言いながらのんびり楽しむが吉。



## コンクレイブ ブライアン・リンチ・ラテンジャズ・セクステット

若い頃はジャズメッセンジャーズやシルバークインテットで修行を積み、今も精進を続けるバッパー。愉快なトランペット小僧という趣きだった彼も最近はどうしりと腰も座って音にもブレいにも貫禄が出てきた感じ。この人ももうちょっと話題になってほしいプレーヤーだと思っただけ。最近ラテン・ジャズを中心に活動。

ブライアン・リンチ(tp)、ラルフ・ポーエン(ts)  
ルイス・ベルドモ(p)、ボリス・コズロフ(b)  
ルーベン・ロドリゲス(b)、アーネスト・シンブソン(ds)  
ロベルト・クイントロ(perc) 2005年録音

これはいわゆる「ラテン風ジャズ」よりももう一歩も二

歩もラテン側に踏み込んだ内容で、まさにバンド名にある通り「ラテンジャズ」。その核になっているのはリズムセクションで、キレ良く、ムダ無く、美しく! 一手一手がいちいち効いてて実にカッコいい! その上に乗るホーン陣とも互いに仕掛け合い、フレーズを応酬させながら奥行きのある立体的なサウンドを作り出しています。

曲は8曲中4曲がリンチのオリジナル、あとはラテンのナンバー。リズムの凝ったテクニカルなテーマをびしびし決めてくれてカッコいいんだけど、いざさか全編に渡って緊張感がみなぎり過ぎて、もうちょっとシンプルな曲も欲しいかも。とか思ったら最後に入ってる〈インビテーション〉がゆったりしたグルーブでいい感じ。

いや〜このアルバムはいい! かなりオススメの1枚。

## JAZZの扉 Vol.7

# オマケに涙してしまいました。

ゲスト  
阿川佐和子

オンキヨーのAVルームに足を踏み入れた阿川さんの第一声は「こ〜いう部屋が家にあったら外に出ない。引き籠もりになるわね」だった。それから1時間半の取材中、「じゃあ、阿川さんの場合、音楽が“王子様”だったわけですね(笑)」とスエツグ編集長が思わず合いの手を入れ、「あ〜、どうしても流れをそっち方向にふろうとしてるなあ、コラッ、編集長!!」と、対談名人の佐和子さんにしかられるなんていう一幕もあった(笑)。

わたしはジャズって好きですけど、詳しくないんです。

だから、探求心も旺盛じゃない。女って慣してそうなのかもしれないけれど、はまったら、ずっとそのアーティストを追いかけるなんてこともないんです。

もちろん、音楽は好きですから、誰々を好きな時代というのはありますが、ジャズは深いし複雑でしょ。私の世代の人間は、ジャズ喫茶でたばこを吹かしながら、深刻そうに顔をしかめて聞きながら、誰かに邪魔をされたら怒鳴るって雰囲気じゃなかったって思っています。だから、好きじゃないな〜気取っちゃってさ〜と、長い間、思っていました。

そんな時に、親しかった男ともだち、恋人じゃないですよ、単なる男ともだちですよ、いや、要するに、恋心があって、その人が好きなものを好きになったという気持は全然ないんですから、男ともだちです。その人がとってもジャズが好きだったんです。最近会ってないですけどね。

大学の、正式には兄貴の友だち。和田君といって、遊びに行くとジャズの話なんかすると、じゃあ、これはどう? これは? って色んなジャズをみんなに聞かせてくれるわけですよ。

へ〜こんなもあるんだ〜なんて聞いてました。

ある時、和田君が、これどう? ってかけてく

れたのがヴァイオリンのジャズだったんです。ステファン・グラッペリーとメニューインが競演しているんですけど、え! ジャズにこんなものあるのって私にとっては衝撃的で、なんと楽しいジャズがあるんだらうということ、クラシックとジャズのヴァイオリニストが組んでやると、素人でも分かるほど音色の違いを楽しむことが出来る、これもジャズなわけ? って、認識がちょっと変わって、ドアが少し開いた感じがあったんです。

興味があるんならこれも聞かない? って彼が言うので、色々聞いてみたら、子供の頃から大好きだったディズニーの音楽はたいがいジャズになっているという話になり、これが白雪姫ね、なんて教えてくれて、「いつか王子様が」が好きだと答えたら、和田君が色んなアーティストが演奏している〈いつか王子様が〉を録音したカセット・テープを作ってくれたんです。

マイルス・デイビスもビル・エヴァンスもMJQも入っていて、それが凄く楽しかった。嬉しくて、何度も聞いていたんです。実は、そのテープの一番最後に、テープが余ったからといって和田君がオマケに録音してくれたのがキース・ジャレットの〈マイ・ソング〉で、その曲を初めて聞いた時に泣いちゃったんです。サクソフの入っているヴァージョンの〈マイ・ソング〉。それが25、6のことですから、四半



阿川佐和子略歴

1953年11月1日東京生まれ。慶応義塾大学文学部西洋史学科卒業後、お見合いに励み、結婚準備をすると共に織物工房でプロの織物作家を目指すもののいずれも挫折。その後テレビ・レポーターの仕事で皮切りにTBSテレビ『情報デスク Today』、『筑紫哲也のNEWS23』でアシスタント・キャスターを経験し、同局『報道特集』でキャスターとなる。エッセイ多数あり、インタビューアとしても活躍中。『ああ言えばこう食う』(樫ふみと共著・集英社)で第十五回講談社エッセイ賞、『ウメ子』(小学館)で第十五回坪田誠治文学賞を受賞他、著書多数。

阿川佐和子

世に過ぎていくのにまだ好きなんです。音楽って、一目惚れと、馴染んで何回も聞いているうちに好きになるものと二通りあると思いますが、何年か一回、一耳惚れがあつて〈マイ・ソング〉がその最たるものです。(談)

編集協力:ピンポイント

e-onkyo.com  
music store

High Definition Sound HD

## 秋吉敏子 音楽生活60周年記念企画

オーディオメーカーのONKYOが運営する高品質音楽配信サイト [e-onkyo music store]と日本クラウンの共同企画



指先から鍵盤へ、彼女が込める想いまで聴こえてくるようだ。

こだわりの音質 24bit96kHz で聴く、日本が世界に誇るジャズピアニスト 秋吉敏子の世界

高品質配信実現のために、レコーディングエンジニア・行方洋一氏によるスペシャルチューン! 今回の配信のために特別にアソートされたベストセレクションを含む13タイトルを順次配信中!

HD高品質音楽配信サイト

e-onkyo music store

http://music.e-onkyo.com/

## 彼は以前の彼ならず。

text by 高見一樹



ピアニスト、中村真がツアーから帰ってきた。「自転車ですべてのツアーしてみたい」というのはどう?。もちろん彼は、自転車つまりチャリの旅をしてみたいといっていたのではなかった。三枚目のソロアルバム、発売記念となるツアーを組んで自転車であつてみたいというのだ。僕には彼の狙いが何なのか全くわからなかったが、面白そうだなというその場の好奇心に負けて「そうですね」とオーケーしてしまった。二ヶ月後、自転車の旅が目的なのか、演奏会が目的なのか僕の中では整理がつかないまま、彼は旅立ち、6月26日、渋谷の公園通りクラシックに帰ってきた。

彼が最初の曲を弾き始めその曲を弾き終えたとき、ツアー中に一体何が起ったのだろうか、ふとそんな疑問が浮かんだ。彼はいつもどおりピアノの前に座り、ピアノを弾いている。ピアノソロとは結局そんなことでしかない。一人の男が人前でピアノを弾く。だけど、この前とは違うし、そのまた前とも何かが違う。さらにはレコーディングの時とも違う。だいたいいつも酒を飲みながら無理難題をぶつけあうあの時の中村真でもない。チャリンコのツアーを終えた彼は、以前の的中村真ではないという印象は演奏が進むにつれて膨らんでいった。

休憩を終えて二部の演奏が始まったとき、あることに気がついた。僕はEWEのA&R/ディレクターで、いろんな現場で様々な人と出会う。新しい可能性をいっぱい秘めた人、とても難しいことをやりとげようとしている人、面白そうなどたらなんでも試してみようとする人、いろんなアーティストが日々、自分なりのアプローチやアイデアを試し、なんとかアーティストとして生き続けようとしている。だけど、彼らなりの考えや作品は、そう簡単には人の耳に届き伝わりはしない。だから、

すべてのアーティストは「わかりやすさ」と向き合い、闘うことになる。わかりやすさの中で仕事をするのはいいといっているのではない。求められているのは、伝わりやすさなのかもしれない。ただこの日僕は、中村真がピアニストとして音楽家として彼なりのわかりやすさを身につけたと感じた。

自転車によって二ヶ月間旅をすること、それを彼は確か「日常を繰り返す事」といった。観光でもなく、自転車を機能的に乗りこなし、スマートに旅の道具として使いこなす事が目的でもない。旅先でピアノを演奏すること、自転車で旅を続けることという目的を果たすこと、それが彼を変えた。「悩めるピアニストが自転車で日本国中を回り始めれば、日本の音楽も少しはわかりやすくなるかもしれない。そんなことになればそういう仕様の自転車をつくるべきだろう。ニッチだ。そしてすべてのライブハウスは駐輪場を確保し、できることならお客様もご来場は自転車をお願いしたいところだ。よくよく考えると地球に優しいじゃないか」ということではない。ただ音楽やアーティストに求められているわかりやすさというのはえてしてこんなレベルのものだ。

リクエストに応じることはわかりやすさではない。中村真が「夏の思い出」を弾いている。そういえば、この曲の作曲者は尾瀬沼に咲く水芭蕉を観てないんじゃないかといっていた。しかしこの曲をアルバムに収録したいと考えた彼は、尾瀬に向かい、尾瀬の印象をこの曲に込める。こうやって作品はいろんな意味を持ち始め、いろんな人の中にさまざまな印象を運んでいく。演奏するというのはこういうことなのかもしれない。

彼は自転車を漕ぎながら彼の音楽を迎えてくる人に一步一步近づこうとしている。八月には北海道を回るという。彼の自転車ツアーは、彼自身が彼の音楽を聴いてくれる人を探した旅だと思ふ。アーティストとしての日常はチャリンコ・ツアーという方法で繰り返され、続けられていく。

### SOLO PIANO vol.3 紡がれた印象 / 中村真

オリジナル曲を中心に「ブルー・イン・グリーン」などのスタンダードを斬新な解釈で演奏したピアノ・ソロ第三弾!



- EWCD-0112 ¥2,500 (tax in)  
2006/7/5 Release
01. Spring can really hang you up the most
  02. That sunday That summer
  03. The comparison of a D ♭ major and the other
  04. 風子
  05. The first water
  06. Blue in green
  07. くまさんのワルツ
  08. Improvisation - Erotic Blue
  09. 夏の思い出
  10. Improvisation - Bluespotted Mudhopper
  11. Improvisation - Erotic Blue

[パーソネル] 中村真 (P)

## 美奈子さんと二人で、武満さんの「強さ」を描いてみた。

香津美、待望のギターネ第3弾を語る。

vol.3

聞き手：末次安里 (本誌編集長)



末次：6曲目に置かれた「MOMO」は、渡辺香津美 NEW Electric Trio の1枚目『Mo' Bop』にも収録されていた谷川公子さんのオリジナル曲です。

香津美：そうです。しかし、あれとは全く違うMOMOが出来たと思っただけですね。デュオのジャズワルツ・チューンというか、この中牟礼貞則さんという方はもう僕の16歳時からのジャズギターの師匠で…僕が最初のスタジオ録音みたいなものをやったのも高校



### Guitar Renaissance III <翼> 渡辺香津美

- EWSA-0125 ¥3,000 (税込) 2006/06/07 Release
01. 虹の彼方へ (Harold Arlen)
  02. クーラント 無伴奏チェロ組曲第1007番より (J.S. Bach)
  03. 天国の階段 (Jimmy Page / Robert Plant)
  04. クーラント "FROM HEAVEN" (J.S. Bach)
  05. 翼 (Toru Takemitsu) / 06. MOMO (Koko Tanikawa)
  07. 星影のステラ (Victor Young)
  08. シェルブールの雨傘 (Michel Legrand)
  09. IF I FELL (John Lennon, Paul McCartney)
  10. クレオパトラの夢 (Bud Powell)
  11. アストロ・ジャンプ (Kazumi Watanabe)
  12. チュニジアの夜 (Dizzy Gillespie, Frank Paparelli)
  13. 月の沙塵 (Suguru Sasaki)

渡辺香津美: guitar / 中牟礼貞則: guitar on tr.7  
古部賢一: oboe on tr.8 / 吉田美奈子: vocal on tr.5

生の時なんです、中牟礼さんのスタジオ仕事に付いていってというかたかななんです。とにかくいろいろとお世話になった方なんです。最近も僕のライブに来ていただいていた。先生は確か74歳にもなられるのに、演奏のほうはとてタイトで素晴らしい。それで「いつかは一緒に!」と思っていましたが、僕のアルバムに招くのは「今かな」という部分がありましてね。今回、お願いしたんです。末次：実際に吹き込んでみての感想は?

香津美：もう、僕の想像以上に…やはり音楽家というのは、実年齢の問題はともかくとして「音は年齢をとらないんだなあ」というのを、先生の演奏からまざまざと感じてね。逆に、まだまだ教えられることが多いと思っただけ。やっぱり一番学ぶのはこう、「現役で演奏なさっている姿」を観るコトだと思うんです。たとえば、自分がアメリカに行っているいろいろなことをやってきた、こんな体験やあんな経験もしましたよ、どうですか?とか。そんなコトを言ってみても中牟礼先生の、その「音の前」ではまた自分が学生に戻るようなか。その意味ではとても良い、清らかな気持ちになりましたね。

末次：共演者の年齢区分もきれいに出来てて(笑)。

香津美：オーボエの古部賢一くんが30代で、中牟礼さんが70代。で、僕と同年なのが「翼」の吉田美奈子さんですね。彼女とはそれこそお互いが20代の頃からいろいろな所で折に触れ出あって、手伝ってもらったりもしてたんです。もちろん日本を代表する素晴らしい、自立したボーカル・アーティストなわけで。最近も一緒にライブコンサートをやったりかかっていますが、今回の直接のきっかけは去年の夏の、新宿ピットイン30周年。

末次：香津美さんの7Daysの一日が美奈子さんとのデュオで! 忘れ難い共演でした。

香津美：ええ、そんな所からデュオのライブをチョコチョコと始めたりして…武満徹さんの没後10周年というコトもあって「翼」を歌ってもらった。美奈子さんに歌ってもらったコトで、武満さんの中の非常にジャズ/ブルース/ロック的な部分というか、とくにブルース性の強い部分が出せるんじゃないかと思っただけ。実際、武満さん本人が一番聴きたかったんじゃないかなと思える「翼」を表現したい。それを出来るのは「吉田美奈子しかいないんじゃないか!」と…で、ご本人に相談したら、彼女も「とても好きな曲です」と言ってくれたので決まったというね。

末次：ピットインでの初披露版を聴いた者としては少し違う印象も受けました。

香津美：僕の側から言うとならぶ、ピットインでやった時よりはもう少しクラシカルに近いようなアプローチで弾いていたんですよ。録音に際してはプロデューサーの谷川から「もっとアーシーなアプローチのほうがいいのではないか」という現場でのサジェッションがあって。今回の「ブルーな感じ」が出たんじゃないかな(笑)、と思いますね。

末次：ああ、凄く分かります、分かります。

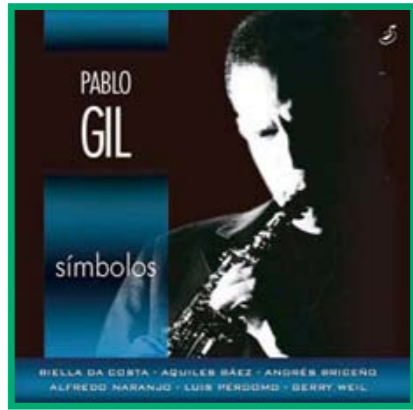
香津美：いろいろな方が武満さんの曲をおやりになるけれども正直、誰もが皆さん、なにかこう「壊れ物を絹でくるむ」みたいに取り扱い場合が多くて。もちろん、それぞれに皆さんが「愛」を持ってやっているんですけども…僕らの場合は少し違って、いわば二人の荒くれ者がなんか土埃をあげながら武満作品を弾き、歌うとどうなるのかという部分もあって(笑)。それによってやはり武満さんの中の「強さ」というのを結果、感じましたよね。(次号に続く)

# 折衷の妙、 に絆されて。



連載 vol.7

text by 小沼純一



## Símbolos Pablo Gil

- 01. Intranquilidad (Pablo Gil)
- 02. Mi Socio (Alfredo Naranjo)
- 03. Dark Horse (Pablo Gil)
- 04. A Mis Hermanos (Aguiles Báez)
- 05. Tambor p'Alfredo (Pablo Gil)
- 06. Profundo (Gerry Weil)
- 07. Long Time Waiting (Luis Perdomo)
- 08. Africa Latina (Leo Blanco)
- 09. Breakdown (Luis Perdomo)
- 10. Pinceladas (Pablo Gil)
- 11. Símbolos (Pablo Gil)
- 12. Aurora Borealis (Pablo Gil)

[パーソナル]  
Pablo Gil (Sax)  
Victor Mestas (Piano)  
Luis Perdomo (Piano)  
Gerry Weil (Piano)  
César Orozco (Piano)  
Roberto Koch (Acoustic Bass)  
Andrés Briceño (Drums)  
Alfredo Naranjo (Vibraphone)  
Aguiles Báez (Guitar)  
Miguel Urbina (Tambora)  
Richard Parada (Maracas)  
Miguel Urbina (Cumaco)  
Richard Parada (Clarín, Guiro & Palos)  
Vladimir Quintero (Congas & Percussion)  
Biella Da Costa (Vo)

パブロ・ジル、なるサックス・プレイヤーを知ったのは偶然、レコードの棚を適当に漁っていたときのこと。すばらしい、圧倒的、とは言わない。むしろ、ふうん、そうなんだ、というかんじ。もしかしたら、こういうところでとりあげる必要だってないかもしれない。ただ、このアーティストのように折衷的な、器用なものだけれども、なかなかオリジナリティを見いだしきれないようなスタンズに、どこかしら引掛かるものを感じることが、個人的には、あつたりするのである。

出身はベネズエラ首都、カラカス。おなじ中南米でも、コロンビアやブラジル、アルゼンチンまでできても、ベネズエラは微妙だ。国の名前は、イタリアのヴェネツィアに由来する。Veneziaであり Venezuela、スペイン語のvはイタリア語や英語などのvというよりbに近いから、カタカナ表記するときはvとばかりずれてしまつてわかりにくいのが、要するに、南米のヴェネツィアといったニアンスだ。

生まれば一九六五年五月。ジャンルは「ジャズ」と「ワールド」、ソプラノとテナーのサックス、そしてフルートを演奏、それがとりあえずフロントにあるプロフィール。さらに詳しくみると、91年から97年まではヨーロッパに住み、パリを中心に勉強、演奏をした。アカデミックな経歴もしっかりあって、幾つか賞も受けている。また、98年から2001年には合衆国に滞在。演奏活動の傍ら、2000年にはニューヨークでM.A. (Master of Arts) を取得している。少し斜にかまえて見るなら、わざわざ言わなくていいんじゃない? という気もならないではない。ただ、外国でライゼンスをとってきたというのが、自国でひとつのステータスになるのだとしたら、どうか。そうした「お国事情」はどこにもある。

リリースしたアルバムは、『Shadows』(10)、『Major Delights』(10)について、本作『Símbolos』が04年3枚目となる。

アルバム冒頭の曲には女性ヴォーカルがはいっている。これがくせ者だ。もし視聴機でこれを聴いたら、うん、これはイケる、と思うかもしれない。比較的ハスキーな声色だが、けつして声域が広いとはいえない。そこがまた、音域の広いこの曲では、ときどき高かったり低かったりするところがちょっと苦しうだった。不安定だったりして、いいのだ。ただ、このビレイヤ・ダ・コスタが歌っているのは一曲のみ。他でも聴けるかと思うと肩すかしを食う。

ヴァイヴァフォンがサックスやピアノとユニゾン風に動き、都会的なセンスがほのみえることもある。だが、このヴァイブも登場は二曲。さらに、最近あまり耳にしなかったような古風なスタイルで弾かれるギターは、楽器のかたちや弾いているプレイヤーの指先の想像させられてしまう、なかなか「身体」性のあるものなのだが、それが全体に融けこんでいるかといえは、それほどでもなく、その浮いたところがまた、耳を惹く。これまた登場は一曲。

二、三曲、ラテン・パーカッションを多用しているのも、クレジットを見れば、すぐわかる。でも、その割には活躍が乏しい。これだけの人数がいるのにビートをちよつと複雑にする程度で、妙におとなしいのだ。カラダがはじけるといふより、アタマで統御している感じがよい。

どうも全十二曲のスタイルが多岐にわたる。なかなかのプレイヤーが登場しても、単なるゲストで終わってしまふ、アルバム全体を押しあげ、イメージ・アップにながっていない。だから、選択的に聴けばけつして悪くないのに、散漫さは免れない。パブロのサックスだって、音色は安定しているし、よくひびくのだけだれど…

でも、こうしたアルバムがベネズエラでリリースされ、パリのEMCAで売られているのである。それが何とはなしに、うれしい。たとえ折衷的であろうとなんのだらうと、ヨーロッパや合衆国で積んできた経験を何とか自分の国で生かそうとしている。作品そのものの出来というレビューとは別のところで、こうしたところにも目を、耳を、もっと向けられたらいいのに、とつねつね思っているほどのスタンズのせいなのだろうけれど。

## 旬でホットなジャズ情報!

# MOONKS EXPERIENCE NEWS Vol.3

text by 白澤茂稔 (MOONKS)

【MOONKSとは..】6人のメンバーの頭文字からなるMOONKS。「批評」ではなく、ただ「好き」を唯一の基準に活動する「ジャズ鑑賞集団」。2004年9月のフリーペーパー「MOONKS Must150」はCD時代の金字塔のガイドブックとして購入者に圧倒的に支持された。『ジャズ批評』のCDレビューに注目。

## ライブのつぼ

我々、MOONKSのメンバーは「パトロール」と称して、新譜、旧譜、中古に関わらずCD・LP漁りを日々欠かさない。名盤の香りをかぎつけ西に東に駆けつける。そして、もう一つ大事なフィールドワークはライブ鑑賞。録音メディアを通しては伝わりえない、その時間、その場所にしか存在しない一瞬の快楽―「ライブのつぼ」。今回は、そんな「ライブのつぼ」を感じたライブの記録。



### 安富祖貴子

at 渋谷JZBrat  
2006年4月17日

東京でのデビューライブとなるこの日、魂のボーカリストも緊張を隠せなかった。アルバムで見た胸を突きぬけ弱った心臓をぐっと驚嘆みにし、力強い鼓動を復活させるようなボーカルが、胸をチヨンと突いて終わっていた。彼女の實力はいかほどかと詰めていた音楽関係者の意地悪い視線も影響したのだろう。

そんな空気が変わったのは、彼女がジャズを志すきっかけとなったニーナ・シモンを持ち歌「エヴリシング・マスト・チェンジ」から。泡だつた気持ちを落ち着けるように目を閉じ、さざめいていた湖面が一枚の鏡のように静まった瞬間、彼女は自然に呼吸をするように歌い始めた。

Everything must Change  
Nothin' remains the same  
Everything must Change  
No one and nothin' remains the same

ざわめいていた会場は一瞬にして静まり、グラスの音さえ居場所をなくした。聴くものは暗闇のなかスポットライトを浴びて放り出されこれからの人生を考え始めた。

この一曲を境に安富祖貴子は魂を取り戻し、川嶋哲郎 (ts) も加わった「ワーク・ソング」で、観客の心臓はドクンと明日への力強い鼓動を打ち始めた。



### 上原ひろみ

at 品川プリンス ステラボール  
2005年12月2日

思わず天を見上げて「すげえ」と声に出してつづやいた。

品川ステラボールでの興奮がいまだに冷めない。帰りの電車、まわりの会話に思考を奪われたくなくてウォークマンのボリュームを上げた。全曲オリジナルの2部構成。きつと凄いだらうと予想はしていたが、甘かった。打ちのめされた。太刀打ちできない圧倒的なスケールと疑いようもない音楽への純粋な眼差し。言葉で感動を語ろうとする行為が無益に思えるほど凄まじいライブパフォーマンス。はあー。昨日から何度目の溜息だろう。洗練されたメロディライン、目に見えない最良の音を見つけ出し指先から放つ。ハイ・テンションのピークでなお雲を突き破り重力を撥ね退け無間の宇宙へ突き抜けるメロディ。左手でリズムを刻み、右手の拳でメロディを叩き出す。ふらふらになって倒れる間際、左手のリズムはその躍動をやめず、鍵盤にエルボーアタックで止めを刺す。はあー。書き始めて2度目の溜息。激しいだけのピアノならラテンもフリーもあるだろう。絶頂の先の絶頂でなおも刻むリズムをずっと美しいメロディで切り返す。世界の陰影がぐっと深まり、時は一瞬その歩みをとどめる。



### ジョバンニ・ミラバッシ

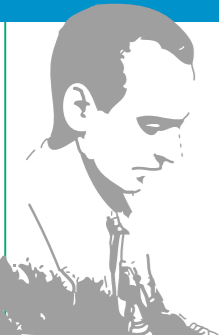
at すみだトリフォニーホール  
2004年11月27日

アンコールの前に勝負はついていた。いや、ミラバッシが一人で舞台上に登場し、スペインの反戦歌「El Pueblo Unido Jamas Sera Vencido (不屈の民)」をソロで弾き始めたときにもう観客の視線はうつろになっていた。このときに勝負はついていた。再びミラバッシが舞台上に現れたとき、隣の女性は涙を拭おうともせず「これ以上、どうするの?」といった雰囲気。そして静かに静かに「Yesterday」は始まった。レイ・ムタン (ds) は素手でドラムを叩きエキセントリックな香りを漂わせる。ミラバッシは鍵盤に覆いかぶさるように白と黒の鍵盤を見つめ、一つ一つ語りかけるように叩く。その鍵盤は心の琴線に直接通じているかのようだ。静寂の後の絶頂。波が暗闇の中、静かに静かに波高をあげ、声を上げる間もなく人を沖に運ぶように、心はここでないどこかに連れ去られたままだ。一瞬の静寂のあとのスタンディング・オベーション。隣の女性は顔を覆い、もはや立ち上がれなかった。

こんな「ライブのつぼ」を求めるあなたに最新のライブ情報。今年の『アトリエ澤野コンサート2006』は一言、「凄い」。アトリエ澤野の2大人気ピアニストの競演。この「つぼ」は見逃せない。

ウラジミール・シャフランフ・トリオ  
ジョバンニ・ミラバッシ&アンドレイ・ヤゴジンスキ・トリオ

11月3日(金・祝) 大阪なんばHatch  
11月4日(土) 東京すみだトリフォニーホール・大ホール  
詳細はwww.jazz-sawano.com



# Impression of Tristano

E ♭

第三回

先月は'99年にトリストラーノの楽曲を演奏するバンドを結成し、まずはギターとピアノのカルテットで活動を始めたところまでの話でした。

結成時のメンバー(ピアノ:都築猛、ベース:海道雄高、ドラム:竹下宗男)とは今でも一緒に演奏していますが、彼ら3人の面白いところは、僕のギターなどほとんど聴いていないことです。曲の出だしのカウントを聴いたら、後は各自勝手に演奏しているのに、かえってそれがトリストラーノ的に聴こえるというか、先月述べたような、「各パートが対位的かつ水平進的に進んでいく」イメージに近くなる気がします。

ところでトリストラーノ派の楽曲には、〈Lennie's Pennies〉や〈Subconscious - Lee〉などに代表されるような、複雑かつメカニク的なテーマ・リフを持つものが多いのですが、そのリフを、鋭角的でアタックの強いピアノやギターと、レガートで柔らかく軽めの音色のサクソスがユニゾンすることで生まれる独特なサウンドは非常に魅力的です。

自分のバンドではギターとピアノの2人だけでテーマをユニゾンしていたのですが、やはりサクソスを入れたサウンドをやってみたく、というよりも生で聴いてみたくなり、メンバーや、知り合いのミュージシャンたちに誰かいいサクソスはいないかと聞いてまわりました。色々なサクソス奏者の方にあたってみたのですが、コニッツやマーシュはほとんど聴いたことがない、あるいは嫌いだったり、テーマ・リフの練習を面倒くさがったりなど、なかなか参加してくれそうな人を見付けられませんでした(ギヤラもほとんど払えないです)。

時々、素晴らしいベテランサクソス奏者の宮野裕司さんに頼ん

でゲスト参加してもらってはいましたが、レギュラーでやってくれるような同世代のサクソスを見付けることはあきらめかけていました。しかし、その後思いがけないかたちで、現在のメンバーであるアルトの増田ひろみさんが加入することになります。

もともと増田さんは知り合いに海道雄高のベースを薦められ、彼の演奏をチェックするために平井バンドのライブを聴きに来たのですが、まさかトリストラーノやコニッツの曲ばかり演奏しているグループだとは思いませんでした。ライブの終演後、「このバンド、サクソス募集してるんですけど、よかったですらやりますか?」と増田さんを勧誘したところ、本人もリー・コニッツは結構好きだということで、その数日後に譜面を渡し、早速翌週にはスタジオでリハーサルを行なうことになりました(早く音を聴いてみたかったです)。

いざリハを始めてみると、増田さんはなんと一週間足らずで、コニッツやトリストラーノのリフをほぼ全曲吹きこなししてしまっていました。本人は「この辺の曲はだいたいC

Dで聴いて覚えちゃってるから、後は譜面で細かい音使いを確認しただけ」と言っていたのですが、それにしても増田さんのテクニックと読譜力には全員驚きました。あらためてサクソスを加えてトリストラーノの曲を演奏してみると、テーマ・リフのメロディ・ラインがより効果的に浮かび上がって聴こえ、やはりサクソスで吹くことを前提に作られたメロディなのだということが再確認できました。増田さんには正式にレギュラーとして加わってもらうことになり、そこからバンドも大きく変わっていききました。(以下次号)



## LIVE スケジュール

●8/18(金) PM2:30  
新宿 PIT-INN(昼) ¥1,300  
平井庸一(G、バリトンG)、都築猛(P)、増田ひろみ(As)、橋爪亮督(Ts)、蛭子健太郎(B)、竹下宗男、鈴木おる(Dr)  
…ドラムが2人になっていますが、1人だけの可能性もあります(?)。

●毎週金曜日 PM7:30  
六本木 FIRST STAGE(03-3405-1910)  
¥2,000(ドリンク付)  
…社会人中心の大人のジャム・セッションです。楽器は全て完備(G,Wb,Vib,Sax,Tp,Tb他)。管楽器の方はマウスピースだけ持ってきてても参加できます。

【ひらい・よういち】  
…ギター奏者/1970年東京生まれ。大学時代に高嶋宏にジャズ・ギターを師事する。キャバレーのハコパンでの修行を経てライブ活動を開始。使用楽器は、オールドのGibson ES-125とシャードウッドギター特製セミアコ・バリトンギター。

# ブロッサム・ディアリーとの、いい関係について。

text by hanao (JJazz.Net)

昼と夜。というのは私にとって、ほとんどまったくの別物です。夕暮れも朝焼けも好きですが、それでも「昼と夜」は別物です。たぶん、子どものころとはまたちがった意味合いで。

そんな風に思っているせいか、「これは昼のもの」「これは夜のもの」と、身の回りのものを無意識にわけているくらいがあります。たとえば、「この本は夜に読もう」とか、「この音は昼に聴こう」だとか。夜から朝にかけて会う友人もいれば、昼間に会って夜更かしはしない友人もいます。その人や、本や、音や匂いに、一日のうちのどんな時間の思い出がより多いかで、おのずとそれらは振り分けられていくのでしょう。

はじめて聴いたのが冬の深夜だったせいか、私にとってブロッサム・ディアリーは夜の音楽でした。終電を諦めて友人を選んだ夜、お店でかかっていたのが彼女でした。たしかアルバムは、『Winchester in Apple Blossom Time』。感動というよりも、強烈な違和感でした。なんなんだ、これは。おばあちゃんなのか、少女なのかわからない得体の知れない声はどうしても気になって、お店のお兄さんにアルバムを見せてもらったのが始まりです。そして、どちらかというおばあちゃんだったことは衝撃でした。まったく、この世のものとは思えない。

この世のものとは思えないほど美しい、という前にまず(もちろん美しいのですが)、本当に人間なのか、と引っかかるわけです。「小鳥がさえずるようだ」という方が私にはぴったりなのではないかと考えています。おろしたての銀の小振りなスプーンがあって、それで綺麗な綺麗な水を少しずつすくっては撒き散らすような、そんなイメージです。いたいけな少女の喉と、酸いも甘いも的な大人のニュアンス。なのに、ちっとも生臭くない。それでいて、きちんと生命感はある。あまつさえ、確かな躍動感まで。「声が若いね」だけではすまされない特異さです。なんど聴いても。なんど聴いた今でさえも。なんど聴いた今だからこそ。

## Blossom Dearie

1975  
from the Meticulous to the Sublime

CMYK-6210  
2004/09/20 RELEASE  
celeste ¥2,415(税込)

Sings  
Own Treasures

CMYK-6209  
2004/12/28 RELEASE  
celeste ¥3,465(税込)

Winchester in Apple Blossom Time

LXCY-6234  
2005/12/28 RELEASE  
celeste ¥2,730(税込)

My New Celebrity Is You

LXCY-6232  
2006/05/24 RELEASE  
celeste ¥2,730(税込)



Winchester in Apple Blossom Time

JJazz.Net で特集を組むことになってから、彼女のいろいろなアルバムをあらためて聴きました。魅力的ですが、非常に特殊です。なにを歌ってもブロッサム節ですが、でも、飽きません。不思議だ不思議だとなんども聴くうちに、ブロッサム・ディアリーはいつの間にか私の、夜だけの音楽ではなくなりました。そういえば、こんな風に昼と夜とをまたぐ存在は私にとって、大切なものばかりだったと思えます。昼だけでもないし、夜だけでもない。一緒に夜を迎えて、朝の始まりを見届ける。昼間にふらっと会って、日が落ちる前にわかることもできる。きまぐれに、夜中にちょっと顔を見たくもなる。いい関係です。

ちなみに今回のブロッサム・ディアリー特集(全16曲)は、こんな風に始まります。

(1-intro)

JJazz.Net THE ARTISTS OF THE MONTH.

今回の特集は、妖精のような声をしたジャズシンガー、ブロッサム・ディアリーです。

はじまりの一曲は、I'm hip。

(JJazz.Net THE ARTIST OF THE MONTH

- Blossom Dearie - 2006.07.05 start)

internet radio station  
**JJazz.Net**  
Japan Jazz Network

eBANK決済スタートキャンペーン >>>  
2006年7月3日(月)~7月31日(月)

http://www.jjazz.net/

特選ジャズライブ聴き放題  
+  
スペシャルCDプレゼント

# Jazz Today

## NEW DISC INDEX

### Comment allez-vous?

#### PINK BONGO

六稜堂 RSD-001 ¥3,000 (税込)  
2006/7/14 Release



おもちゃ箱をひっくり返せ! だれでも御存じの JAZZ の名曲、映画音楽 はたまた歌謡ヒットメロディーを、奇才 宮本大路のあつと驚く斬新なアレンジで、笑っていただきます。また ちりばめられたオリジナルナンバーのなんとセツナイことか! メンバーは今ももっとも旬な チョイ恵オヤジたち。

- 01. ピンクボンゴのテーマ / 02. 真赤な太陽
  - 03. Coltrane Culture / 04. 情熱の花 / 05. 足手まとい
  - 06. 会津磐梯山 / 07. Blue Velvet / 08. ねえ、君次第
  - 09. The Preacher
- 宮本大路 (sax <soprano, alto, tenor, baritone>, flute, clarinet, bass-darinet, toys, chorus)  
高橋ガタ夫 (baby & e-bass, vocal, percussion, chorus)  
宮崎カネ信義 (guitar, vocal, chorus)  
中島徹 (piano, pianica, trombone, chorus)  
村上ポンタ秀一 (drums, chorus)

### Jazz cover

#### 森田葉月 & 森川七月

GIZA studio GZCA-5085 ¥2,800 (税込)  
2006/7/26 Release



大阪でライブ活動続ける実力派 JAZZ シンガー姉妹が 1st アルバムを発売。シングルで発売した「Amazing Grace」の他に、様々なアーティストがカバーしてきたバラードの名曲の数々をじっくりと歌い上げる。

- 01. Pretend / 02. PSI Love You / 03. Summertime
- 04. Caravan / 05. Lately / 06. Do You Want To Dance ?
- 07. More ~ Fly Me To The Moon ~ Moon River / 08. Fever
- 09. Autumn Leaves / 10. Sentimental Journey / 11. Night And Day
- 12. Skylark / 13. Amazing Grace

森田葉月 (Vo/Ch)  
森川七月 (Vo)

### スリーピー・アット・ザ・ビデオ

#### 松本英彦

THINK! THCD-020 ¥2,520 (税込)  
2006/6/23 Release



「スリーピース・ムード」と「ジャム・セッション」という構図で展開された、1959年4月14日、ビデオ・ホールでのスイート & ホットな記録。

- 01. ハーレム・ノクターン / 02. エターナリー
- 03. アイ・ガット・リズム / 04. テンダー / 05. 椿くるは愛のみ
- 06. ボディ・アンド・ソウル / 07. フラミンゴ
- 08. ウォーキング / 09. ジャングル・ドラムス
- 10. チェロキー / 11. 今宵のきみ / 12. 四月の思い出
- 13. スイート・ジョージア・ブラウン

松本英彦 (ts/v)  
渡辺典夫 (as/v)  
中村八大 (p)  
上田剛 (b)  
ジョージ川口 (ds/ect)

### 重力の虹 (Slave To Africa)

#### ペドロ・マルティネス

intoxicate records intx-1008 ¥2,600 (税込)  
2006/7/19 Release



ラテン+ファンク+ヒップホップ+ジャズ+アフロビート... アンドレス・レヴィンプロデュース

- 01. イントロ / 02. ヨルバ・ソイ / 03. ケ・トゥ・キエレス
- 04. ラ・ビシクルータ / 05. マミ・ノ・セ / 06. サブロン
- 07. ベンディシオ・マドレ / 08. ショーナ / 09. ティメ・ケ・テ / 10. スレイヴ・トゥ・アフリカ

Pedro Martinez (Vocals, Drums, Percussion, Keyboards & Programming) / Andres Levin (Guitars, Keyboards) / Panagiotis Andreou (Bass) / Cucu Diamantes (Vocals) / Zazona Martinez (Vocals) / Mauricio Herrero (Drums, percussion) / Marvin Diaz (Percussion) / Antonio (Tonito) Martinez (Percussion) / Octavio Cotan (Guitar) / Alfredo De La Fe (Violin) / Eimar Castaneda (Harp) / Ron Blake (Sax) / Rashawn Ross (Trumpet) / Jay Rodriguez (Sax) / Mike Rodriguez (Trumpet) / Pablo Vergara (Keys) / Barry Rubin (Percussion toys) / Brian Morales (MC) / Brian Lynch (Trumpet)

### ONLY YOU

#### 川下直広 Featuring 永見行崇 and RORY JOHNSON

地底レコード B36F ¥2,940 (税込)  
2006/5/13 Release



フェイザン解散後も精力的に活動を続ける SAX 奏者、川下直広。地元、博多の老舗クラブでのライブ演奏を中心にまとめたアルバムが完成!

- 01. ONLY YOU
- 02. WHEN A MAN LOVES A WOMAN
- 03. BESAME MUCHO
- 04. TEMPORARY SONG
- 05. AND I LOVE HER

川下 直広 (Soprano and Tenor Saxophone, Violin, Guitar, Mandolin, Banjo, Harmonica, and All Other Effect)  
永見 行崇 (Organ) on 1,2,3  
RORY JOHNSON (Drums) on 1,2,3

### ブルー・ハイ・ランド

#### 太田寛二

THINK! THCD-019 ¥2,520 (税込)  
2006/6/23 Release



満卷く熱気にソクソクする和・バップのハイブル的な作品。太田寛二の魅力がすべて凝縮された奇跡のピアノ・トリオだ。(大河内善宏)

- 01. CARAVAN
- 02. LOVE WALKED IN
- 03. CREAM . . . ?
- 04. BLUE HIGHLAND
- 05. MY IDEAL
- 06. JUST IN TIME
- 07. MY CONCEPTION
- 08. REFLECTION

太田寛二 (p) 小杉敏 (b) 岡山和義 (ds)

### ファンキー! 登場! +6

#### 白木秀雄

Think THCD-021 ¥2,520 (税込)  
2006/6/23 Release



和ジャズのかっこよさ、ここに極まる。天才ドラマー=白木が女優との結婚直後に吹き込んだレア作。ラブラブ気分にはれたドラマスト、ファンキー・ジャズの正面衝突! (原田和典)

- 01. 私は満足 / 02. 恋の日記 / 03. めぐり逢い
- 04. ラテン・ファンタジー / 05. ブルース組曲/パート1
- 06. ブルース組曲/パート2 / 07. ブルース組曲/パート3
- 08. ブルース組曲/パート4 / 09. サヨナラ・ブルース / 10. アー・ソー
- 11. チューン・アップ / 12. ラウンド・アバウト・ミッドナイト
- 13. ワーク・ソング / 14. バラード・メドレー: ブルー・ムーン・ラウンド・アバウト・ミッドナイト

松本英彦 (ts) / 福原彰 (tp) / 世良譲 (p) / 栗田八郎 (b)  
白木秀雄 (ds) / etc.

### パゾリーニに捧ぐ

#### アントニオ・ファラオ

オーマガトキ OMCZ-1020 ¥2,625 (税込)  
2006/8/2 Release



イタリア映画の巨匠パゾリーニに捧げた、欧州美学に溢れる傑作ピアノ・トリオ作。

- 01. マンマ・ローマ〜チャチャチャ
- 02. マンマ・ローマ〜ストルネッタ
- 03. 生命ある若者〜セレナータ・チャチャチャ
- 04. メデア / 05. 豚小屋〜ジュリアンとイデア
- 06. 豚小屋〜メラニコリックな間奏 / 07. テオレマ
- 08. ステラ / 09. エディプス / 10. 生命ある若者〜イレーネ
- 11. 生命ある若者〜テーマ・ソング

アントニオ・ファラオ (p)  
ミロスラフ・ヴィトウス (b)  
ダニエル・ユメール (ds)

### 夢で逢いましょう

#### 村上ゆき

Silent/POLYSTAR P5CR-6174 ¥2,800 (税込)  
2006/7/19 Release



その声はたおやかに、やすらかに。村上ゆきピアノ弾き語りニッポンのスタンダード。

- 01. テネシー・ワルツ / 02. ゆらりるの唄
- 03. 上を向いて歩こう / 04. 港が見える丘
- 05. ボカボカ〜春夏秋冬 / 06. 思ひこめてやりにきれない
- 07. 花咲く旅路 / 08. 夢で逢いましょう
- 09. 自転車でおいで / 10. ボカボカ〜秋冬編
- 11. うさぎの唄 / 12. 花咲く / 13. そして僕は途方に暮れる

村上ゆき (ヴォーカル/ピアノ)  
鬼怒無月 (ギター)  
佐藤芳明 (アコーディオン)  
瀬木貴将 (サンボニーヤ)

### Solitary Moonlight

#### TAKANO NAOYUKI Jazz Orchestra

PRODUCT-ON records PON-107 ¥2,520 (税込)  
2006/7/25 Release



- 01. Sailing For Amazing (高野猪幸オリジナル)
- 02. Sing Sing Sing (Louis Prima)
- 03. Moonlight Serenade (Glen Miller)
- 04. All The Things You Are (Jerome Kern)
- 05. Someone To Watch Over Me (George Gershwin)
- 06. Goody Goody (Matt Malneck)
- 07. Solitary Moonlight (Claude Debussy)
- 08. My One And Only Love (Guy Wood)

高野猪幸 (Leader)  
ゲスト参加: 中村妙理 (Vo)  
横田寛之 (As) / 安川信彦 (Ts) / 中江裕気 (Ts) / 市川智恵子 (Bs)  
高橋祐一 (Tp) / 真木さおり (Tp) / 安達奈央美 (Tp)  
市原ひかり (Tp) / 榎本裕介 (Tb) / 田辺武史 (Tb) / 小野寺淳 (Tb)  
足立恵子 (Btb) / 吉野大樹 (pb) / 川本悠吾 (Bass) / 久納弘幸 (Dr)

### 須永辰緒の夜ジャズ ~Jazz Allnighters No.5

#### V.A.

COLUMBIA COCB-53558 ¥2,600 (税込)  
2006/8/2 Release



男ばかりが熱く燃える深夜3時。「レコード番長」として須永辰緒氏セレクトによる人気の「夜中仕事」ジャズ・コンビ「夜ジャズ」はコロムビア盤の登場です! スタンダードとレアもの、そして北欧ジャズ、和ジャズに至る迄、ジャズ・マニアもクラブ世代も納得の選曲! これはイケる!!

- 01. Nica's dream [アト・ファーマー] / 02. Three for you [インジブル・セッションズ] / 03. Bohemia after dark [ケニー・クラーク] / 04. My favorite things [ルイス・エイズ・グループ] / 05. Fairy tale [R] / 06. LIGHT HOUSE [ライブ・コーナース・クイック] / 07. 渡良瀬 [藤沢] / 08. Lo ve you spell is everywhere [カーティス・フラー] / 09. Midsummer Sun [アー・ボニー・デュ・トリー] / 10. Summertime [藤沢] / 11. Libido-Mediterranean sundance [アキ・グレス] / 12. ソーラン節 [藤沢] / 13. Dam that dream [ジョー・ワイルダー]

### ロマンティック・ラティーノ・フォー・レイディズ

#### ラージュ・ルンド

Leafage Jazz PCCY-30094 ¥2,940 (税込)  
2006/7/19 Release



2005年セロニアス・モンク・コンペティションで優勝! 新人ジャズ・ギタリスト、ラージュ・ルンドのデビュー盤は、ロマンティックで切ない、ラテン・カヴァー集!

- 01. おいしい水 / 02. ジャンゴ / 03. 波 / 04. 愛は海よりも
- 05. アランフェス / 06. フルー・ボッサ / 07. 哀愁のアダージョ
- 08. アラウ・サ・ソ・ワールド・イン・ア・ボトル
- 09. コルコヴァード / 10. ヴムス & ホーシズ

ラージュ・ルンド (g)  
アーロン・ゴールドバーグ (p)  
マット・ブリューワー (b)  
ロドニー・グリーン (ds)

### ジャズ・バイ・ザ・シー

#### ポール・スミス・トリオ

Warner Bros MZCS-1095 ¥2,500 (税込)  
2006/7/21 Release



ソフト・サウンディング・ジャズを代表するピアニスト、ポール・スミスのトリオによるレアなライブアルバム。ポール・スミスといえば、歌謡プレイヤーとしてもエラ・フィッツジェラルドの「エラ・イン・ベルリン」をはじめ多くの名演を残しており、その歌心溢れるタッチで、ピアノ・ファンに定評がある。本アルバムは、アメリカ西海岸のジャズ・クラブ「フンタナ・デ・ボーン」でのピアノ・トリオによるライブ録音したライブ・レコーディング。ローラ・ライスのサンフランシスコはじめボビリーなテイストの選曲となっている。

- 01. ローラ / 02. スクニャー・リヴァー
- 03. ホット・カインド・オブ・フル・アイ・アム?
- 04. マウンテン・グリーナード / 05. サテンドール
- 06. 悪いのサンフランシスコ / 07. 幸せになりたい / 08. タンジェリン
- 09. フライ・ミー・トゥー・ムー / 10. ザッツ・オール
- 11. イッツ・オールライト / 12. ハウ・アバウト・ユー?

ポール・スミス (p) ウィルフレッド・ミドルブルックス (b)  
フランク・キャップ (ds)

### ブラジリアン・ソフトリー

#### ポール・スミス

Warner Bros MZCS-1096 ¥2,500 (税込)  
2006/7/21 Release



マニアクなピアノ・ファンからクラブ系のリスナーまで幅広い人気を持つピアニスト、ポール・スミスのエッセンスをちりばめた、知られざる名盤が遂にCD化! 既にCD化され、若いリスナーを中心に好評のCapitol盤「クール&スパーキング」や「ソフトリー・ベイビー」などにも通じるイージー・リスニング・ジャズの決定盤。タイトルからもわかるようにジョビンの名曲やジョアン・ジルベルトの名演などで知られるボサノヴァの人気タイトルを中心に収録。

- 01. ワン・ノート・サン・V / 02. バードランドの子守唄
- 03. メディテーション / 04. ランパ・イズ・ロウ
- 05. コルコヴァード / 06. ブラジリアン・デトゥアー
- 07. イバ・イバの娘 / 08. ディスカヴァー / 09. ハウ・インセンシブ
- 10. ソー・ナイス / 11. モア / 12. ザ・ナット

ポール・スミス (p)

### テテ・プレイズ・ボサノヴァ

#### テテ・モントリュー

ensayo MZCS-1097 ¥2,500 (税込)  
2006/7/21 Release



今は亡きスペインを代表する人気ピアニスト、テテ・モントリューが、地元の ensayo に残した珍しいブラジリアン・アルバム。ダスコ・ゴイコヴィッチを語る上で欠かせない名作「アフター・アワーズ」でのダイナミックなプレイも素晴らしいが、ブラジルの名曲の数々を理屈めきで楽しめる本アルバムも広い音楽ファンにアピールするはず。

- 01. フレシダ / 02. 黒いオルフェ / 03. オルフェのサンバ
- 04. イ・カンマ / 05. コルコヴァード / 06. ワン・ノート・サンバ
- 07. オ・カンガセイロ / 08. イバ / 09. ブラジリアン / 10. オサニヤの歌
- 11. ヴェイヴ / 12. ソー・ダンス / サン / 13. デサフィナード
- 14. メディテーション / 15. トリス・テラ

テテ・モントリュー (p)  
ミケランジェロ・リザンドラ (b)  
アルベルト・モラレダ (ds)

**ジャイヴ・サンバ ~ジョアン・ジルベルトに捧ぐ**

**ジョン・ヘンドリックス** Reprise MZCS-1098 ¥2,500 (税込) 2006/7/21 Release



名ヴォーカル・グループ「ランバード、ヘンドリックス&ロス」のメンバーとして長年活躍したジョン・ヘンドリックスの魅力満載した人気アルバムが待望の国内初CD化！ボサノヴァの巨匠、ジョアン・ジルベルトのレパートリーを一味違ったアプローチで甦らせたサマー・テイスト・ジャズの決定盤！ヴォーカリスの父と言われるジョン・ヘンドリックスのプロアー・シーンを熱くする裏名盤でもある。

01. アヒルのサンバ / 02. コルコヴァード / 03. あなたと私  
04. 愛と平穏 / 05. 小さな紙風船 / 06. バイアへの郷愁 / 07. 汽車  
08. 思いあふれて / 09. ローザ・モレーナ / 10. 一番美しいもの  
11. わが祖国のサンバ / 12. また、再び / 13. ジャイヴ・サンバ

ジョン・ヘンドリックス (vo) / etc.

**GET ON THE STICK**

**金丸敏明** ROOTS RECORDS RRRK-0001 ¥2,000 (税込) 2006/8/23 Release



日本でも数少ない超高の CHAPMAN STICK 奏者「金丸敏明」STICK 1本にこだわった、全オリジナル曲による初のソロアルバム！

01. Introduction  
02. Departure  
03. Secret Journey  
04. 月の灯  
05. Prime of Life  
06. Roots  
07. Wonderland

金丸敏明

**Sustained Affection**

**Immigrant's Bossa Band** DIW THE GARDEN DG-24 ¥2,100 (税込) 2006/6/23 Release



魂は踊り、心を濡らすデビューアルバム

01. Sustained Affection / 02. Feelin' / 03. Saudade / 04. Grandational Reflection / 05. Interlude / 06. Immigrant's Samba / 07. Make a Vow  
08. 約束 / 09. Sustained Affection (Steel Pan Version) / 10. Sustained Affection (Yoshizawa dynamite.jp Remix)

Rei Teikuramori (vo, g)  
Nobu (per)  
Sugames Japón (key, per)  
Hide Kawai (b)  
Tatsu (ds)

**le le**

**asana** Easel EASL-0001 ¥2,520 (税込) 2006/6/10 Release



良質なインテリアのように、あるいは朝露の向こうから差す朝の光のように、空間に澄んでいくオーガニック・アンサンブル

01. Le Le / 02. 六月の水 / 03. Night Breath / 04. Sea Circus  
05. From A Spring / 06. みちしるべ (feat. naam) / 07. Kitchen  
08. Moon & Sand / 09. Fourth Sun / 10. Star Train

浅野裕介 (g, vo, etc) / etc.

**SONGS OF THE MILKYWAY TERRA etude for saxophone**

**本多俊之** CRESCENTE CRSA-1003 ¥1,500 (税込) 2006/7/27 Release



天(ソラ)からの贈り物。サクソフアンサンブルシリーズ第三弾。

01. Tellurium  
02. Rutil  
03. Alabaster  
04. Vivianite  
05. Spinel  
06. Galaxite  
07. Alabaster(minus one)  
08. Vivianite(minus one)

All Instruments by Honda Toshiyuki

**アドリブ・サクソ〜コード、スケールからの演奏意識改革〜**

**NAOH** アトス・インターナショナル ATDV-117 ¥3,990 (税込) 2006/7/20 Release



「コード」と「スケール」をテーマに、アドリブについてを楽しくながら解説する究極のサクソ教則DVD！

01. コードの基礎知識  
02. ビバップアドリブスケール  
03. II - V 進行について  
04. 3コード・ブルース進行  
05. ジャズアドリブについて  
06. 3コードアドリブ - V に当てはめてみる  
07. ブルー・ノート・スケール  
08. ジャズとクラシックの違いについて

NAOH (ASAX)

DVD VIDEO

**Satisfaction**

**Ino hidefumi** INNOCENT RECORD IRCD-0001 ¥2,625 (税込) 2006/6/9 Release



この響きに潜むものを、世界はどう受け止めるのだろうか。フェンダーローズに愛された男、猪野秀史 待望のデビューアルバム遂に登場。音楽を愛するすべての人へ。

01. Spartacus / 02. What Are You Doing The Rest Of Your Life  
03. Why Are We At War / 04. Billie Jean / 05. Behind The Rainbow  
06. Midnight at The Oasis / 07. Love Theme From Spartacus #Piano  
08. Madsummer Reminiscence / 09. Solid Foundation  
10. Just The Two Of Us / 11. Soshu-yakyoku / 12. Never Can Say Goodbye

イノヒデフミ etc.

**ポリネシアン・パラダイス**

**Phil Moore & His Orchestra** em records EM-1057CD ¥2,310 (税込) 2006/6/20 Release



ハリウッドの映画音楽業界で活躍、エキゾ・ファンにはレダ・アーネスト「Portrait of Leda」の音楽監督や前衛的ソロ作品で名高いコンダクター・アレンジャー・フィル・ムーアが指揮したエキゾチック・アルバム。レス・パクスター・マーティン・デニーへのコントリビューションをのり越えて迫る音世界、南太平洋のイメージを多彩な編曲で見事に表現した楽園音楽。思考も止まる快楽体験をお約束。1959年発表作品。初CD化。

01. Return to Paradise (Washington-Tiomkin) / 02. The Far Mountain (Mangrove) (Moore) / 03. vMaiden Island (Moore) / 04. Blue Hawaii (Robin-Rainger) / 05. Pearls of Palmyra (Moore) / 06. The Moon of Manakora (Loesser-Newman) / 07. Bali Hai (Hammerstein-Rogers) / 08. Fiji Farewell (Moore) / 09. Flamingo (Anderson-Groug) / 10. Turtle and the Rickshaw (Galapagos) (Moore) / 11. Pagan Love Song (Freed-NH.Brown) / 12. Trade Winds (Quenza-Newman)

フィル・ムーア & ヒズ・オーケストラ

**波動**

**藤井郷子オーケストラ** P.J.L MTCJ-3032 ¥2,625 (税込) 2006/6/21 Release



2人ずつのソリストがフィーチャーされた8曲は「NY アンダーグラウンド・オールスターズ」のカレイドスコープ

01. Metal / 02. Water / 03. Wood / 04. The Moon / 05. The Sun  
06. Undulation / 07. Fire / 08. The Earth

Oscar Noriega, Briggan Krauss (ASax)  
Ellen Eskelin, Tony Malaby (TSax)  
Andy Laster (BSax)  
Natsuki Tamura / Herb Robertson / Steven Bernstein / Dave Ballou (Tp)  
Curtis Hasselbring / Joey Sellers / Joe Fiedler (Tb)  
Satoko Fujii (Piano)  
Storm Takeishi (Bass)  
Aaron Alexander (Drs)

**ライブ !!**

**藤井郷子オーケストラ** Libra Record LIBRA 215-015/215-016 ¥3,990 (税込) 2006/6/21 Release



ビッポインがジャングルに！猛獣たちの叫びを聞け！！  
CD & DVD で白熱のライブの模様をお茶の間に！！

01. Scramble / 02. Water / 03. An Unpaved Road / 04. A Brick Work  
05. A Submarine / 06. Fue Taiko / 07. Bennie's Waltz

早坂紗知 (soprano & alto sax)  
泉邦宏 (alto sax)  
松本健一 / 木村昌哉 (tenor sax)  
吉田隆一 (baritone sax)  
田村夏樹 / 渡辺隆雄 / 福本佳仁 / 城谷 雄策 (Trumpet)  
はぐれ豊永松 / 東 哲也 / 高橋 保行 (trombone)  
藤井 郷子 (piano)  
永田利樹 (bass)  
堀越 彰 (drums)

**Oneself - Likeness**

**quasimode** Inpartaint IPM-8007 ¥2,500 (税込) 2006/6/28 Release



タビー・ベイズのカヴァー「Down In The Village」で、センセーショナルなデビューを飾った和製ジャズ・バンド、クオアモードの1st。ピアノ・トリオ・パーカッションのカルテットで、曲によってホーンやヴァイブが加わる。この編成から判るように、かなりラテン・ジャズ度が濃厚なバンドで、それはすなわちクラブで踊る為の演奏を意図したバンドであると言える。でも、単純にクラブ出身バンドと括るには、その演奏は実にしっかりしたものであり、ハードバップやモード・ジャズの基本もっちり押さえている。現代版ラテン・ジャズ・カルテットを意図したバンドかも知れない。「Down In The Village」を除き全てオリジナルで、作曲能力も非常に高い。しかもインストのみというところに、演奏だけで勝負できるバンドの実力という自信が伺える。今後の活躍が楽しみなバンドだ。・remix

01. Catch The Fact - Intro / 02. Down In The Village  
03. Giant Black Shadow / 04. 1000days For Spirit / 05. Lucky Luciano  
06. Ipe Amarelo / 07. Skeleton Coast / 08. Feelin' Green  
09. Oneself - Likeness / 10. Catch The Fact - Outro

平戸祐介 (fender rhodes, p) / 松岡高廣 (per) / 奥津岳 (ds)  
須長和広 (b) / 小坂正人 (produce)

**A Letter From All Nighters**

**Sunaga t experience** flower records FLRC-045 ¥2,709 (税込) 2006/5/24 Release



全てをジャズにジャズに投影するのだ投影するのだ。そうジャズは夜。夜はジャズなのだ。

01. Jazz Allnighters / 02. In Case Of Emergency / 03. Metropoli  
04. Lov'n A Bird / 05. Nostalgic Eyes / 06. Versiliana Samba  
07. Dig The Nu Breed / 08. A Healing Blues  
09. High At Noon (Dedicate To Noon Osaka) / 10. Sasuke  
11. Cube Libre / 12. Edward Hopper  
13. (Bonus Track) Versiliana Samba The Five Comes Quintet Version

Producer - Sunaga T Experience

**maru**

**藤井郷子オーケストラ** BAKAMO RECORDS BKM-005 ¥2,500 (税込) 2006/6/21 Release



崩壊と統合の狭間をギリギリのラインで行き来するオーケストラ。怒涛の TOKUZO ライブレコーディングによる待望のセカンドアルバム！爽快だけドチャームング。

01. Slip-on / 02. Pakonya / 03. Maru / 04. Yattoko Mittoko  
05. Bennie's Waltz / 06. Sakuradori Sen

Satoko Fujii (conduct)  
Shingo Takeda / Akihiko Yoshimaru (alto sax)  
Yoshiyuki Hirao / Yoshihiro Hanawa (tenor sax)  
Daion Kobayashi (baritone sax)  
Natsuki Tamura / Tsutomu Watanabe, / Takahiro Tsujita  
Mitsuki Ishiwata (trumpet)  
Tomoyuki Mihara (trombone)  
Toshinori Terukina (trombone / euphonium)  
Tatsuki Yoshino (tuba)  
Yasuhiro Usui (guitar)  
Shigeru Suzuki (bass)  
Hisamine Kondo (drums)

**Kobe Yee!!**

**藤井郷子オーケストラ** Crab Apple Records -002 ¥2,500 (税込) 2006/6/21 Release



ニューヨーク・東京・名古屋そして神戸  
神戸の LIVEHOUSE BIG APPLE レーベル第2弾！！

01. Fire / 02. Tobifudo / 03. The Future of the Past / 04. Kobe Yee !!  
05. Shikaku / 06. Sola

田村夏樹 (tp/conductor)  
藤井 郷子 (pf/conductor)  
船戸 謙 / 房原 忠弘 / 平岡 新 (tp)  
谷口 知巳 / 富岡 敏志 (tb)  
岩田 江 / 水谷 康久 (as)  
荒崎 英一朗 / 武井 努 / 登 敬三 (bs)  
吉野 竜城 (tuba)  
船戸 博史 (b)  
井崎 能和 (ds)

**フヘハ**

**泉邦宏** キタカラレコード K-8 ¥2,625 (税込) 2006/6/23 Release



サクソ奏者泉の渾身の魂つふし。笛三味でハッピートリップ。けっこう癒系です。

01. 妖精のホーンパイプ / 02. 口笛吹きのケーシー / 03. 私たちの町の少年 / 04. ジョニーはセリダへ / 05. 山の上の子供 / 06. 昨夜のたのしみ / 07. ヒュー・キレスビーのマズルカ / 08. ボイン・ハンター / 09. 髪をたくしてカールして / 10. 青い丘の少年 / 11. チャーリー以外に王はいない / 12. 大麦のスタック / 13. プロスナ・スライド / 14. 妖精のホーンパイプ (saxes) / 15. あんたがたごこさ / 16. 夜の鳥 / 17. 夜の大型鳥 / 18. ある晴れた日曜日 / 19. 陽気なおじさん / 20. 今日の天使 / 21. そらにさかな / 22.のみすた / 23. お正月 / 24. ままならぬままに / 25. 龍宮城の鯉 / 26. フヘハ

泉邦宏 - sax

**ザ・ヴォヤージュ**

**Sleep Walker** ヴィレッジアゲイン VIA-0050 ¥2,400 (税込) 2006/7/19 Release



Sleep Walker の新作は、ファラオ・サンダース、ユキミ・ナガノ、ベンベ・セグエらのゲストを迎え、今年のハイライトといえる傑作。最高にエキサイティングなアルバムが完成！！

01. AH-NO-TABI  
02. INTO THE SUN feat. Bembe Segue  
03. THE SOUTHERN CROSS  
04. AFLOAT feat. Yukimi Nagano  
05. LOST IN BLUE  
06. KAZE  
07. REMINISCENCE  
08. THE VOYAGE feat. Pharaoh Sanders

中村雅人 (Sax) / 吉澤はじめ (Piano) / 池田潔 (Bass)  
藤井祥昭 (Drums)

# INFORMATION

## 中村健吾 2006年7月・8月ツアースケジュール

No Name Horses directed by 小曾根真

- 07/25 (火) 日立シビックセンター (間) 0294-24-7755
- 07/29 (土) 俱知安ジャズフェスティバル (間) 0136-23-2929
- 07/30 (日) ヨコスカジャズドリーム 2006 (間) 046-823-9999

中村健吾 & 海野雅成 Duo

- 08/01 (火) 古河/Up's
- 08/02 (水) 四日市/ムーシケ
- 08/03 (木) 京都: RAG
- 08/04 (金) 神戸/サテンドール
- 08/05 (土) 大阪/Mr.ケリーズ
- 08/06 (日) 名古屋/Lovey
- 08/07 (月) 本厚木/Cabin
- 08/08 (火) 浜松/ハーミットドルフィン
- 08/09 (水) 静岡/Kolin
- 08/10 (木) 東京/Alfie

(間) 55 RECORDS 03-5785-2357



## フェイ・クラーク「ベイカー/マリガン」BAND ロブ・ヴァン・バヴェル・トリオ 来日決定!

10/07 (土)・10/08 (日)  
横濱 JAZZ プロムナード  
(間) 横濱 JAZZ プロムナード実行委員会事務局 TEL 045-682-2015

### フェイ・クラーク「ベイカー/マリガン」

10/10 (火)  
東京BODY&SOUL  
(間) BODY&SOUL  
TEL 03-5466-3348

<来日メンバー>  
フェイ・クラーク (vo)  
ヤン・メニュー (bs)  
ヤン・ウェッセルス (tp)  
カレル・ポエリー (p)  
フランツ・ヴァン・ギースト (b)  
ジョン・エンゲルス (ds)

### ロブ・ヴァン・バヴェル・トリオ

10/11 (水)  
東京BODY&SOUL  
(間) BODY&SOUL  
TEL 03-5466-3348

<来日メンバー>  
ロブ・ヴァン・バヴェル (p)  
フランツ・ヴァン・ギースト (b)  
ジョン・エンゲルス (ds)

## Reggae Sunsplash in Japan 2006

2006年8月19日(土) 開場 12:00 / 開演 14:00  
横浜・新港埠頭特設ステージ

出演  
フレディ・マクレガー / ジミー・クリフ / キップリッチ  
ルチアーノ / レイヴォン / シャギー / ウエイン・ワンダー

入場料金  
ブロック指定 (ゲート外 / 7A-7D) 前売 ¥9,000 当日 ¥9,500  
座席指定 前売 ¥10,000 当日 ¥11,000  
※ ダンスエリア / フリーエリアは座席はありません。  
※ 料金は各税込

主催: Fm Yokohama / InterFM / Tokyo FM  
共催: ヨコハマシーサイドフェスティバル連絡協議会  
後援: TVK テレビ  
協力: Cool Sound / 24x7 Records / ビクターエンタテインメント  
企画制作: トゥモローハウス / キョードー横浜  
お問合せ: キョードー横浜 045-671-9911

一般発売: 発売中  
電子チケット / イブニング / ロックチケット /  
CN プレバド / キョードー横浜



## ニューヨークの今を表現した次世代ジャズ!! 「井川弥生 NYトリオ」来日決定!

### 【井川弥生 NY トリオ JAPAN TOUR 2006】

- 8月23日(水) 新潟ジョイア・ミーア tel:025-224-2588
- 8月24日(木) 大阪ジャズオントップ tel:06-6341-0147
- 8月25日(金) 大分ネイマ tel:097-567-1517
- 8月26日(土) 名古屋スターアイズ tel:052-763-2636
- 8月27日(日) 金沢もつきりや tel:076-231-0096
- 8月28日(月) 博多ニューコンボ tel:092-712-7809
- 8月29日(火) 赤坂Bフラット tel:03-5563-2563
- 8月30日(水) 富士市(静岡)ケルン tel:0545-52-0468
- 8月31日(木) 横浜ドルフィー tel:045-261-4542

【メンバー】  
井川弥生 (ピアノ/作曲)  
タイシヨーン・ソーリィ (ドラムス)  
ジム・ロバートソン (ベース)

<http://www.yayoiikawa.com/>



## 本誌編集長がゲストを迎えて、トークと新譜を中心に紹介する2時間番組、『JazzToday(Radio edition)』。MUSIC BIRDにて7月から放送中!!

ミュージックバードとは...

衛星を利用した世界で唯一の超高音質デジタルラジオ放送局。  
クラシック、ジャズ、歌謡・演歌、J-POP、洋楽などの全10チャンネルで24時間好きなだけ音楽に浸ることができます。

<http://www.musicbird.jp>

月々2100円で手に入る上質の音楽生活!

TOKYO FM「PCMファンクラブ」  
～音楽ファンのためのシステム～

「PCMファンクラブ」に入会すると、専用チューナーとアンテナのセットを無償レンタル。月々のご負担2100円(税込み)だけで、ミュージックバードのPCM放送・全チャンネルを毎日24時間聞き放題です!



# The live line!

## 8月の新宿ピットイン

【夜の部】

開場 PM7:30 開演 PM8:00 ¥3,000～(1DRINK付)



8月8日(火) quartz-head 02+03  
クオーツ・ヘッド [フジワラ・ダイスケ] (Sax,Syn) ハタケン (Syn)  
坪口昌恭 (P)  
C-TAKE (VJ)

8月9日(水) 白庭潤 & YOUNG RABBITS

白庭潤 (Sax) 佐藤雄大 (Key) 高瀬賢二 (G) トオダイスケ (B) 福森康 (Ds)  
小沢敏也 (Per)

8月10日(木) HIROSHI MINAMI GO THERE!

南博 (P) 竹野昌邦 (Sax) 水谷浩章 (B) 芳垣安洋 (Ds)

■ JIM O'ROURKE 恐山 2DAYS ■ 前売 ¥4,000 当日 ¥4,500

8月11日(金)

ジム・オルーク (G)  
ダーリン・グレイ (B)  
クリス・コルサーノ (Ds)

8月12日(土)

ジム・オルーク (G)  
ダーリン・グレイ (B)  
クリス・コルサーノ (Ds)

◎チケットぴあ、新宿ピットイン (店頭販売のみ、13時から) にて、7/8より前売り開始。



JIM O'ROURKE

8月13日(日) 今村祐司 GROUP

今村祐司 (Per) 中村誠一 (Ts) 橋本信二 (G) 渋谷毅 (P,Or)  
上村勝正 (B) 本田珠也 (Ds)

8月14日(月) Complete Imaginary Number 「夏の夜の真実」

松本治 (Tb,他) 外山明 (Ds) 石渡明廣 (G) かわいしのぶ (B,Vo)  
高良久美子 (Vib,他) ライオンメリー (P,Aco,他) 原みどり (Vo)

■ 梅津和時夏のふりふり 2006 ■ ¥3,500

8月15日(火) グレートインプロ Duo × 2

梅津和時 (Sax,Cl) 斎藤徹 (B) 千野秀一 (P)

8月16日(水) 新大久保ジェントルメン+福岡ユタカ、仙波清彦

グレート金時 (Vo,Reeds,Per) イゴール (Vo,Key,Per)

アブドゥール・ワハハ (Vo,Vn,Per)

福岡ユタカ (Vo) 仙波清彦 (Per)

8月17日(木) 鬼怒無月 NIGHT

鬼怒無月 (G) ナスノミツル (B) 外山明 (Ds)

8月18日(金) 幸島文雄 NIGHT

幸島文雄 (P) 池田篤 (As) 桜井郁雄 (B) 原田迅明 (Ds)

8月19日(土) 原朋直 カルテット

原朋直 (Tp) 道下和彦 (G) 伊藤望 (B) 岡田佳太 (Ds)

8月20日(日) Vol.1

三好「3吉」 功郎 (G) 村上「PONTA」 秀一 (Ds)

グレッグ・リー (B) 仙波清彦 (Per)

8月20日(日) Vol.2

三好「3吉」 功郎 (G) 村上「PONTA」 秀一 (Ds)

小野塚晃 (Key) ほか

◎新宿ピットインにて、7/8よりチケット (予約可) 前売り開始。

8月21日(月) 夏休み

8月22日(火) 夏休み

8月23日(水) 夏休み

## SHINJUKU PIT INN

〒160-0022  
2-12-4 ACCORD BLDG. B1  
Shinjuku shinjuku-ku Tokyo JAPAN  
☎ 03-3354-2024  
<http://www.pit-inn.com>

8月24日(木) Satoko Fujii Four Japan Tour 2006

前売 ¥3,700 当日 ¥4,000

藤井郷子 (P)

田村夏樹 (Tp)

マーク・ドレッサー (B)

ジム・ブラック (Ds)

◎新宿ピットインにて、7/8よりチケット (予約可) 前売り開始。

8月25日(金) 板橋文夫 オークストラ

板橋文夫 (P) 井野信義 (B) 小山彰太 (Ds) 片山広明

(Ts) 林栄一 (As) 田村夏樹 (Tp)

福村博 (Tb) 吉田隆一 (Bs) 太田恵資 (Vn) 外山明 (Per)

◎新宿ピットインにて、7/8よりチケット (予約可) 前売り開始。

8月26日(土) ジョージ大塚 NIGHT

ジョージ大塚 (Ds) 深沢真奈美 (P) 高山夏樹 (B)

8月27日(日) 早坂紗知 夏の祭典 前売 ¥3,000 当日 ¥3,500

早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) おおたか静流 (Vo) 程農化 (二胡)

Killer Bomb (from Think Tank) コスマス・カピツァ (Per)

◎新宿ピットインにて、7/8よりチケット (予約可) 前売り開始。

8月28日(月) 村上寛 「VIVO!」 CD 発売記念ライブ

村上寛 (Ds)

佐藤允彦 (P)

加藤真一 (B)

峰厚介 (Ts)

8月29日(火) What is HIP? ¥3,500

松木恒秀 (G) 野力奏一 (Key) 岡沢章 (B) 渡嘉敷敦一 (Ds)

8月30日(水) 坂田明 mii + 仙波清彦 ¥3,500

坂田明 (Sax,Cl) 黒田京子 (P) バカボン鈴木 (B) 仙波清彦 (Per)

8月31日(木) 板橋文夫 DUO

板橋文夫 (P) 梅津和時 (Sax)





## ■バス男(DVD)...

個人的には、映画業界にありがちな時流便乗型のコテコテ邦題が決して嫌いじゃない。その出典を記すのもバカバカしい本作をレンタル店で気にかけていたのも「バス男」ゆえであるし、へんに捻った長い邦題では好奇の停留所を通過していただろうし、原題の『ナポレオン・ダイナマイト』では内容の“読み”を誤っていただろう。で、999円(税込)のセル商品を目にした時は迷わずゲット!! これが凄い。十人十色な脱力系キャラが中盤あたりからじわじわ効いてくる。そしてクライマックスのカタストロフィ…推理小説の原則に従って「最大の見せ場」は明かささないが、バス男着用のTシャツが全米でブレイクしたという逸話も大納得。観終えて初めて「原題」の正當さが染みる傑作!

## □文化デリック・編著『ポップ・カルチャー年鑑2006』(DAI-X出版)...

昨年暮れの新刊好著、芝山幹郎著『映画一日一本〜DVDで楽しむ見逃し映画』(朝日文庫)や、古本で掘り出した'93年刊の瀬戸川猛著『夢の研究〜活字と映像の想像力』(早川書房)を読むにつけ、見逃している傑作の多さに仰天し、廉価版DVDで出れば即購入の昨今。そんな乗り遅れをせめて1年程度に抑えたい方には今、この一冊が一番のお奨め本だ。とにかく目利きの達人たちが映像、出版、音楽等、縦横無尽にリスペクトして語りつくす文化教材集。個人的にはASA-CHANGの章で『続・藤井貞和詩集』の話題が出てきたコトに一番仰天した。「それでいいのさあ〜」とバカボン・パバの拍手を送り、入稿を終えたらCDを買う!

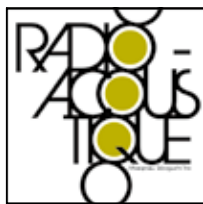


## □JazzToday臨時増刊『「発芽する音」の記録』...

今月初旬にツアーを行なった山本精一 / 勝井祐十アルゼンチン音響派の公演会場限定で無料配布した小冊子。昨年のNYライブ、プエノスアイレスでの彼らの録音 & 公演に同行した際の画像を厳選して編んだ全16頁の写真絵巻であるが、今さら「欲しい…」と悔やまれても困る。東京セッションの結晶『KIRIE』から始まり、プエノスでの成果『Chichipio』『IZUMI』と続く「地球の裏側同士」の共鳴しあう素晴らしさについては、最近の号で何度も連呼してきたのにそれでも会場に足を運ばなかったアンタが遅い。本誌編集部は時折、そういふゲリラ刊行物を出すので注意。

## □丹生谷貴志著『死者の挨拶で夜がはじまる』(河出書房新社)...

'94年刊行の福岡哲司著『深沢七郎ラブソディ』(TBSブリタニカ)をそろそろ読み終わるといふ日に入った古書店で出遭い、ばらばらと捲てみたら冒頭の聞き書きに応じて「これは最悪なかもしれませんが、僕には書きたい主題が何も無い。注文があるから書くというだけなんです」といふ著者(1954年・東京生まれ)のコトバが目焼きついてきて、同じ年の同じ東京生まれであるじぶんは妙に打たれた。推理小説のような書名であるが、90年代後半の「文藝」時評を中心に構成された一冊。次いで澤宮優著『放浪と土と文学と〜高木護/松永伍一/谷川雁』(現代書館)と読み進むあたり、映画は「旬」を、本は「過去」へ、の自己傾向が著しい。



## □JazzToday(Radio edition)...

衛星デジタルラジオ放送局「MUSIC BIRD」で聴ける本誌連動型企画番組。尽きるところ紙面では伝えるコトのできない話題の楽曲を、新譜中心に紹介中。毎回ゲストを迎えて、新作の制作秘話やジャズへの想いを聞き出している。今号の配布開始前後に放送される回では坪口昌恭をスタジオに迎え、Masayasu Tzoboguchi Trioの第一弾アルバム『Radio-Acoustique』(FLYCD-09)の構想の原点や、彼のザヴィヌル音楽に寄せる想い、Outthere時代のじぶんとTZBの出遭い話等、楽しいひとときを送った。毎回狙っているわけではないのだが収録日は必ず徹夜明け(涙)、声はかなりガラガラだ。

## ■ニューオーリンズ(DVD)...

1947年の作品でルイ・アームストロングとピリー・ホリデイの共演が堪能できる本作。「シネマクラシック」と銘打ったシリーズ中の1本だが、パッケージをひっくり返しても特に定価の表示は見当たらず、たぶん(きっと)いわゆるワンコインが相場のDVDなんだろうが、じぶんは御徒町の量販店価格390円でもゲットした。先程、文化デリック本の項でも映画ガイド本の良書を紹介したが、一方「なんだか最近刊行されるジャズ本からは肝心の“音楽”が聴こえてこないんだよなあ…」とお嘆きの諸兄には絶対推奨の1本である。作品の舞台は「JAZZ」がまだ、世間に浸透する以前の戦前のNEW ORLEANS。虚実が交差し、美談化も当然施されているだろうが「観て識る」要素多し。



**Jazz Today**<sup>®</sup>

jazz today 28号

発行人：鯉沼利成

制作：jazz todayプロジェクト

編集人：末次安里 表紙画：タジマヤスタカ

〒107-0062 東京都港区南青山3-4-7-402

デザイン：Factory Jam (岡本義憲&三村洋一)

専用電話：03-3746-8760 e-mail：sue@image.ocn.ne.jp

ブログ版 編集長日誌 公開中! <http://blog.goo.ne.jp/jazztoday/>